953
新鐫
繡像
西遊記
卷一

特41
953

西遊記卷之壹

總目錄

靈根孕育源流出　心性修持大道生
悟二徹菩提眞妙理一　斷レ魔歸レ本合二元神一
四海千山皆供伏　九幽十類盡除レ名
官封二弼馬一心何足　名註二齊天一意未レ寧
亂二蟠桃一大聖倫レ丹
反二天宮一諸神捉レ住
觀音赴レ會問二原因一
小聖施レ威降二大聖一
八卦爐中逃二大聖一　五行山下定二心猿一
我佛造レ經傳二極樂一
觀音奉レ旨上二長安一
陳光蕊赴レ任逢レ災
江流僧復レ讐報レ本
老龍王拙計犯二天條一
魏丞相遣レ舊託二冥吏一
遊二地府一太宗還レ魂遇二瓜菓一劉全續レ配
唐王選レ僧修二大會一
觀音顯レ像化二金蟬一
陷虎穴金星解レ厄　雙奴嶺伯欽留レ僧
心猿歸レ正　六賊無レ踪
蛇盤山諸神暗佑　鷹愁澗意馬收レ韁
觀音院僧謀二寶貝一　黑風山怪窃二袈裟一
行者大鬧二黑風山一
觀音院唐僧脫レ難　觀音收二伏熊羆怪一
雲棧洞悟空捉二八戒一　高老莊行者降レ魔
黃風嶺唐僧有レ難　浮屠山依英受二心經一
讖法設レ莊留二大聖一　半山中八戒爭レ先
須彌靈吉定二風魔一
八戒大戰二流沙河一　木叉奉レ法收二悟淨一

西遊記卷之一

靈根孕育源流出　心性修持大道生

混沌の初其狀卵のごとし陽氣の輕く清るゝ上浮みて天となり陰氣の重く濁るゝ下凝て地と爲其中ゐ萬物ことゞく發生し人を生じ獸を生じ禽を生じ天地人の三才それ〳〵よ位を盤古氏の開闢せし時世界わゝれて四大部洲とあれり則ち其國の名を東勝神州　西牛賀州　南贍部州　北俱盧州と号す其東勝神州の海外よ一ッの國あり名を傲來國といふ此海中ゐ一ッの山あり華果山と号山の上よ一塊の怪石あり開闢以來天地の精氣を持ち仙胎を育りあるゝ此石忽ち迸しり裂て毬りのごときある石卵を產けるゞ化して一ッ石猿とあれり此猿眼よ金色の光りを發ちて天に輝きしゝゞ此時上聖玉帝天上の寶殿ゐまし〳〵て此光りを見て大ゐにおどろき給ひ千里眼順耳風の兩大將を召して看せ玄め給ふ此千里眼ゝ一目に千里の外を見ゆき順耳風ゝ居ながら世界のあらゆる事を聞知れりかゝる名譽の兩將なれゞかしてより南天門を開きてくゝと見聞しやゞて歸り報じけるゝ東勝神州傲來國に石猿ありて眼金色の光りを發ちゝ此猿水を飲五穀を食しゝへゞ此光りもやゞて息みゝんと奏す玉帝

聞給ひ是怪むよさらずとて打捨て置れけるされば石猿漸生長し峯よ遊び洞ゐかくれ猶ゐ伴ひ鹿とたゝむれ歳月を送りけるがある時群猿と共ゐ飛泉の下ゐ遊び居りしに一ッの猿言を出し誰ゐてもあれ此飛泉の水を潜り中の形容を見屈る者あちば拜して我徒らの王と尊ひべしと言時に石猿すゝみ出我よく是を見屈んと云もあへず身をおどらせて瀑布の中へ飛入たり扨頭と上て見まいせば瀧の内い却つて水ゐく前よ鐵ねの橋あり其傍らに石碣あり華果山羅地水簾洞洞天といふ十字を鐫たり橋を渡りて行ば數歩朗らうゐして人家の住居に同じ石猿見終りて再び瀑布の外よ躍り出群猿よむらひ去らゝのさまを物語り是我輩らの安居すべき屈竟の處ゐり我よ去たがひ瀑布の中へ來れやとて多くの猿をともゐひうされて瀧の内よ楽内しければ衆々の猿ども内のありさまを見て大きゐ悦び先に約せしごとく石猿を拜て群猿の中の王とす爰よ於て石猿自らら美猴王と名を稱じ猿猴猕猴馬猴等の衆々の猿を從へ朝ゐ花果山よ遊び暮にい水簾洞中ゐ宿し已ゐ三百余歳を經たり一日美猴王長嘆して聞て曰く我今人王をも恐れず猛獸をものゝうずとせず洞中に有て樂しひといへども後年老血氣衰へ閻王のとらいれと成り亦世界輪回の中ゐ生れんこそかゐしけれゝうし爰と去て遠く世界の中を思流し神仙を尋て不老長生の術ゐ學ばんとて多くの猿よいとまを乞ひ洞中を出たり夫がが枯松を編て鮮とゐし竹をきりて篙とゐしそことも知らぬ大海の波の上よぞ漕出ける數日東南の風に吹れて終よ南贍部州の地ゐ着きさりける猴王やがて岸ゐ上り彼方此方と立やすろふゐ海邊の漁人これを見て大きゐ畏ろきゐゐかそろしの大猿やとちりゝよ逃走るを猴王追うけて一人を拿へ其衣裳を剝取て是を着し市廛の中ゐ入て人の禮と學び人の詞をならい如何よもして神仙とさづね長生不老の術と需んと日夜心ゐ盡しける

うくて八九年の歳霜を過し再び筏に乗りて西洋海を渡り遂に西牛賀州の地に至り岸に登りて歩み行に山高く峯秀　餘に希代の靈地あり時に林の中に歌唱ふ人聲す猴王耳を冷して是を聽に其歌の辭に曰く

觀レ棋　柯爛○伐レ木　丁丁○雲邊　谷口徐行○負レ薪　沾レ酒○狂笑　自陶レ情○
蒼逕　秋高○對レ月　枕二藤根一○覺　天明○認二舊林一登レ崖○遇レ嶺○持レ斧　斷二
枯藤○收　來成二一担一○行歌　市上易二米三升一更無二些子爭競一○時價
平々　不レ會二機謀巧算一　後二榮辱一恬淡　延レ生　相逢處　非レ仙即道○靜
座講二黃庭一

猴王これを聞て大きによろこび扨い神仙此地に在ありと忙き走りよりて是を見れば一人の樵夫斧を持て柴を伐居たり猴王禮をなして老神仙と呼ぶ樵夫もまゝ蓋だ驚き我い身さ山賊あるに何ゆへ神仙と呼び給ふと云ふ猴王笑ふて今の歌を聞に相逢處非仙即道靜座講二黃庭一と歌ひ給へり黃庭とは道德の眞言なり神仙にあらずしていうでう是をうゝひ給いん樵夫これを聞て打笑ひ此歌い我作に非あらず此里に一人の神仙有名を須菩提祖師と

ゆすゞ此歌を我に敎へ唱しめ給ふなりと云猴王の曰く其神仙の居處いづくぞや樵夫則ち指さしてくわしく是をおしへぬれば猴王大きによろこび暇をなして相別れ歌の如く南の方七八里來り見るに果して一座の洞府あり洞門かたく閉て人語の聞ゆるなし前に石碑ありて靈臺方寸山斜月三星洞の十字を鐫付たり猴王もみだるゝ門を敲ず闖進して行みけるに一人の仙童門を開き立出て猴王に向ひやけるい我師法會等に行みゐると知り給ひ道を學ぶ弟子なるぞひゝへ入よと命じ給ふ汝果して道を學ぶ志ありと欲する者歟猴王傳いで禮をなし小子實に道術を師に聽んとす希ゞいくい引て見へしめ給へといふ童子則ち猴王をぐして俱に洞の內に入直に瑤臺の下に至れば祖師臺上に座して左右に三十餘人の仙人あらび立り猴王謹んで禮拜し道を學ん事を乞祖師の曰く你何國の者にて姓名い如何猴王のふ弟子い東勝神州傲來國華果山水簾洞の者にてい名師を尋る事十餘年洋を渡り界を越幸いに祖師を拜する事を得たり且又弟子姓も名もなし又父もなく母もなし我本國花果山上に一ツの仙石あり其石中より產れ出たり祖師笑ふて你ゞ軀まさに迦陵に似たり我你ゞ身に生さゞふて姓名を定ひべしとて姓を孫名を悟空と賜ふ猴王再拜して恐を謝し終に此洞中に

留り只一心ゐ道を學ぶん事を願ひける

悟二徹菩提異妙理一　斷レ魔歸レ本合二元神一

去程に孫悟空い洞の中よ在て道を學び聽事覺へず六七年唯長生の道を學びんとのみ希ひて更よ外の道を聞事を求めず祖師も悟空ゞ才智兼ゐ秀たるを去らせ給ひ或時試みゐ傳いつて大きよ怒りをおし手ゐ戒尺を持て罵つて曰く你ゞ猴孫智惠此をも學ばず彼をも學ず何事とおさんとするやと悟空ゞ頭を三下打手を背よ付て走て中門を閉入給ふ悟空此動靜の仔細ゐりげゐるを見て其意を按じ見るゐ頭を三たび打給ふい三更の時ゐり手を脊よして走て中門をとさし給ふい我よ後門より寢所に來れ人に語らざる道を密よ傳へ給いんとの謎おうと悟り其夜子の刻ゑのびて後の門を押に果して此門半開たりされぱこそとて身を側て門内ゐ入り地ゐ躍づきて祖師の覺るを待ゐたり暫くありて祖師眠覺め悟空を見て你夜中爰よ來て何事をゥおすやと咎め給ふ悟空對て師父さのふ弟子よ三更の時後門より來れ道を傳んと宣へり此故よ無禮をも顧みず此よ來つて教を俟今傍らに曾て人おく只弟子一人のみなり希わくい不老長生の道を傳へ給へ永く師恩の深きをわすれいいとすす此時祖師悟空を近くまねき長生の妙道を委く授け給ふ悟空謹んで其口訣を受よろこぶ事いはんうたゐし是より後日夜其術に工夫をこらし又三年を過しけるゐる時祖師悟空よ謂て曰く汝長生の妙道を學び法性顯る通ずるといへども却てまた三ッの災いあり是を防ぐの術ありや悟空答ていふそれ道隆く德高き時い天と壽きを同じふす水火既よ盡き時い百病生せずとゐと承まいる何ゆへゐ三ッの災いい候ぞや祖師の曰く今より後五百年を經て雷災あり你ゞ身を碎くべし亦五百年の殺火災あり你ゞ身を燒べしまた五百年ゐして風災あり你ゞ身を吹滅るべし是你ゞ三ッのわざいひあり悟空是を聞て大きにおそれ師父憫みをたれて此三災を免れしめ給へ爰よおゐて祖師悟空ゞ耳ゐ口をつけ七十二般の地煞變化の法を傳へ給ふ悟空一一に是を傳授し悅んで道法を練事又三年終よ雲中を飛行せるの道を得たり祖師是を見て示し給ふ你ゞ雲中ゐ在るい飛行せるよわらす是雲の中を爬ゐるく者ゐり汝ゐ觔斗雲の法を授べしとて又一ッの秘方を傳へ給ふ此觔斗雲の法い只一刻の間よ十萬八千里を飛行せる自在の法おりぱ悟空また是を據る事數年既ゐ功業完く備り天地の間よおゐて妙道を究めずといふ事おし一日門下の弟子等松樹の下よわりて遊びしゲ皆悟空よむうひて云前日師父汝ゐ變化の法を教給

へりと聞り今試みよ身を變じて松の樹と化し我輩らゐ見せようしと望みぬれば悟空いとやすき事なりと身を搖すと見へける〻忽ち變じてひとつの松の大木と化たりけりあまたの弟子等是を見て手を打辯を上化し得たるゐ奇ゐり妙ゐりと稱讃せる事ゐしゞまし祖師此聲を聞て門外に出て是を見れば悟空變身の法を行ひすまし一大松樹と化したりける師父徒弟等を遠く退ぞけ悟空をまねきさとして曰く汝衆弟子の中よ於て變身して松樹と化たり人皆汝ゞ其術よくわしきを見て必ず汝よ求めて習ひ得んと乞ふべし汝若傳へずんば渠必ず害心をさしはさみ汝ゞ命も保ちゞたゐちん快く此所を去て性命を全くせよとの給へば悟空是を聞て兩眼より泪を流し我師父にわゐれて何國の所へゐ還りゆすべきとさめ〳〵と詫び歎きけるを師父聲と厲して汝何より來りいづくより去ると荊し給ふよ悟空忽ち悟り我れ東勝神州傲來國華果山水簾洞の者ゐりとて遂よ祖師よ暇を告げ即ち觔斗雲ゐ打乘直よ華果山よ還り來り雲より下て聲を高くし小猿どもいづくゐ在りや只今ゐへり來れりと呼れば數萬の猿ども我おくれじと走り出悟空ゞ前よ禮拜し曾一同に中けるれ大王爰を去給ふの後我々洞中ゐりたく守りて御歸りを相待しゐこのごろ一人の魔王此洞と奪ひ取らんとす是ゐ依て我我力を盡し防ぎ戰うふといへども却て渠に多くの子弟を生捕られ既ゐ此山も洞もこと〳〵くゐの魔王ゐ奪れおんとす大王よろしく計りて此妖魔を退ぞけ給へと云悟空聞て大きゐ怒り此魔王れ何れの處よりゐ來れるやもろ〳〵の猿答て曰く渠ゞ住所れ此直北ゐ在と覺ひ感ゐのり霧を踏て自ら混世魔王と名乘飛來りひ程ゐ道のほどれいゐはどありとも知り得らず悟空是を聞終て忽ち身を聳だて雲上ゐのぼり北の方へ飛行はるゐ四方を見渡せば險山の間よ物の聲あり顧て雲と下て伺ふよ一ッの水簾洞あり門外よあやしき小鬼たれひれあそび居たりしゞ悟空を見て大きゐ驚き我先よ門内に逃入ゐゞ悟空大音ゐ呼りけるれ汝等走る事ゐかれ我れ是花果山水簾洞の主汝ゞ家の混世魔王我眷屬をゐおどるよし殊に來つて仇を報ず早く出て我と鬪ひを交へよと焉りけるを聞て甚だ憤怒り身よ金蓋鎖甲を着し大の刀と手に提り門外へ走り出水簾洞の主れいづくに在はやく來て死を快よくせよと大聲一喝山谷を動搖せり悟空口を開て呵々と笑ひ汝眼大ゐりと雖も我ゞ此所よゐる事能れず魔王も又大きに笑ひゐゐ無悪や汝ゞ身纔ゐよ四尺に滿ず來つて我に鬪れんれ卵を以て大石ゐゐたるゞごとしみよ〳〵唯今粉のごとくなし捨んと大刀を振て斬てゐ

ふる悟空其時身外身の法をつかひ身内の毛一把を拔て口に含み空ゐ向つて噴出せバ忽ち三百有餘小猿と化しかの魔王が身邊よむらがりかゝり面部手足のきらひなくひし〳〵とゝりつきて只一寸も動かせず悟空則ち走りより魔王が刀を奪取り兩段よ砍て捨洞の中へおけ入て眷屬どもを殺し盡し魔に生取れし小猿等をたづね出し水洞を燒て再び雲中に身を投ト水簾洞ゐぞかへりける

四海千山皆供伏　九幽十類盡除名

孫悟空ハ混世魔王を退治し水簾洞に歸りて後屬手の猿等をあつめ日々ゐ武藝と習いしめ傲來國ゐ行てゐまたの鋼戟兵器を奪ひとり小猿どもゐわかちあたへ毎ら洞中を守るの備へをおし其身ハ龍宮城に至て武器をもとめんとの水簾洞の橋の下ゐ入り閉水の法をつかひ波濤を潛り終ゐ東海龍王の都ゐ至る忽ち海底を見めぐりする役人巡海夜叉といふ者悟空を見て甚だいぶかり汝ハ是何所の者おれバ爰ゑ來て王城を窺ふやと答めけるゐ悟空こたへて吾ハ華果山の天生聖人孫悟空といへる者ゐ汝却て我を知らざるハ何事ぞや夜叉これを聞て急ぎ龍王ゑ去り〳〵と言上す東海龍王忙ぎ出迎へ誘ひて殿ゑ上り問て曰く上仙何の特遣を得て何の仙術を得玉ひたるや悟空が曰く我生れ出ると其儘出家修行し無生無滅の體と得たりてのゝち我眷屬どもゐ武藝と習ハすゑより特ゐ來りて打物を需んとす龍王聞て易き事ゐていとて其重さ三千六百斤の九股叉と七千二百斤の方天戟をとり出し悟空が前にさし置バ悟空手にとりて打ふり〳〵試みけるが龍王を顧て曰く我うゝる輕き武具ハ是をつかふゑ手にたらずいかゐもおもき武器を出して與へハ得龍王の曰く上仙ゐもき武器をもとめ給ハゞ我海藏中ゑ收めたる神珍鐵の如意棒を見給へとて誘ひて海藏ゐ至る悟空近よりて是を見れバ鐵棒の長さ二丈余りゐして金色の光輝きたり兩端ゐ金の箍を入れ如意金箍棒重一萬三千五百斤と一行の文字を鐫つけたり悟空まづ兩手をもつて此棒をとり上恨らくハ此棒ゐまり長く余り太しと其いふ言いまだ終らざるゑ不思議ゐるうゐ此鐵棒忽ち縮みよりて悟空が心にうゐおひたる手ごゝろの棒と變じたり悟空大きゑゐやしみ龍王ゑ向て其故を問ふに龍王の曰く此神珍鐵の棒ハ往昔夏の禹王水と治め給ひし時海の淺深を定め給ひし定子ゐり伸す時ハ上ハ三十三天に至り下ハ十八層地獄ゐ及ぶまた縮まる時ハ僅ゑ一二分計の綉花針とゐりて耳の中ゑ藏し入る眞ゑ奇妙の如意棒ゐり悟空是を聞て大きゐよろこび猩甲やわるゐた

へゝ得と請ふおまりせ藕絲步雲の履一雙鎖子黃金の甲一領鳳翅紫金の冠一頂をとり出して
あたへけれバ悟空よろこぶ事斜あらず終ゐ龍王ゑ別れを告げ水簾洞へ歸りける爰ゐふしぎ
の事のありけるゝ一日悟空酔ゐ乘じ松樹の下ゐ睡眠けるゞ夢ゐ怪しげゐる者二人出來り悟
空を引て大きゐる城門の前ゑ至る悟空頭を上て城門を見れバ一ツの鐵牌ゑ幽冥界の三字を
書たり悟空問て曰く幽冥界とゝ閻王の居所ゑあらずや何の事ありて我と此所にいざゐい來
りしやかの兩人答へていふ汝今娑婆の命數盡るにより我等兩人勾つれて爰に來れり悟空
聞もあへず大きに怒り怒ち耳の中より件の如意棒をとり出し其長一丈ばゝりの鐵棒とゐし
唯一打ゑりの兩人を打殺し鐵棒を水車ゐまわして城中へ打入れバあまたの鬼ども驚きおそ
れ森羅殿ゐ逃上りさわぎわへる事大ゝたゐらず十代冥王これを聞き急き出迎へ悟空を見て
其姓名を問ふ悟空此時大きゑ呼バゝつて曰く汝等我名を知らずして何ゆへゐ人を遣わして
此所へよびよせたるや我ゝ是菓果山水簾洞天生聖人孫悟空ゐり元來仙道を修行し天と齊
をゐな玄うし三界を出て輪回を去れり然るをゐんぢらいゝゐれバ我命數のつきたるといふ
や冥王の曰く上仙まゝ怒りをとゝめ給へ天下の理に名の同ゝきものもゐまた有べし是ゝゐ
らず人錯ゐてこそゝゝん悟空ゲ曰く我曾て聞とゐり汝等ゲ冥官の配し置く生死の簿子ゐり
と聞り持來つて我ゐ看せよ冥王乃ち掌案判官を召して生死の簿子をとり出す悟空手ゑと
りてくりゐへし是を見るゐ猿の類ひの中ゑ孫悟空天產の石猴壽三百四十二歲壽終すべしと
かき記せり悟空筆をとりて眞黑ゑこれをぬり滅し其余猴の名ゐるものをことゞく滅し終
りかの如意棒をふりまわし冥王に物をもいわず幽冥界を出るとおもへバ忽ち夢ゝ覺たりけ
る今ゑ到て猴の類ひの命長きゝ陰司生死の簿子に名を除きたる故ありとやさるはどゐ東海
龍王ゝ孫悟空無體ゑ武器をとり歸りし事を憤ほり表を作りて上天玉皇上帝ゐ奏聞し其罪
を糺し給ゝん事を告せバ又幽冥よりゝ教主地藏王菩薩よりも悟空ゲ生死の簿子をぬり滅た
るよし訴たゐぬれバ玉帝文武の仙卿をあつめはやく討手を下さんと議し給ふゑ太白星すゝ
み出て奏しけるゝ此猴今既ゑ仙道を修し得て獸ものゝ類ひゑあらず今勅使を下して彼を天
上にめし上し官職授けて此處ゑ留め置き若天命に順ゝゝと再たび恩賞を行ひ天命ゐ違ひな
バ其時とらへて刑罰を行ひ給へ玉帝是ゑ玄たゲひ給ひ卽ち太白星を勅使として華果山へて
そ下されける

官封二弼馬一心何足　名註二齊天一意未寧

太白星い玉帝の命を受既よ水簾洞よ至り孫悟空よ對面し勅詔のそもむき審らかに述ければ悟空一言の異議に及ばず太白星ともろともに天上に至り靈霄殿の下よ參りて玉帝を拜す玉帝卽ち悟空をもつて弼馬温の職を授け給ふ此弼馬温の職い馬を養ふ役にて甚だいやしき官なれども悟空元來官職の高下を考らずよろこびて任に到り已よ半月を經たりけるが同寮の官人が物がたりに馬をやしのふ賤官のよしを始めて聞牙を咬んで大に怒り我華果山よ在時既に王位にのぼれり如何ぞ我をあざむき來りて馬を養ないしむるやとて忽ち耳れ中より如意棒をとり出し變ずて一丈余りの鐵棒となし御馬監を走り出て華果山へこそ立かへり屬手の衆猿につまりむかへ大王天上ふかりて榮花を受給ふおらん抑何れの高官をか得て歸り給ふと問ふ悟空憤然と答て曰玉帝元來人を用ゆる事を知らず我に馬を養ふいやしき職を授け顔る恥辱をあたへたり是よ依て遂に走て爰よりへれり衆猿是を聞てやけるい大王此洞中に在して觀樂に足ざる事あし何の望ありてか天上に至りかゝるいやしき職を受給ふや我徒ら快く酒をすゝめて大王の憤ほりをやすめ奉つらんと頓て酒宴を催し長興を催しける時に獨角の鬼二人赫黃袍一領を献じて孫悟空が前に再拜し永く手下に屬せんと乞ふ悟空大きによろこびの鬼兩人を先陣の大將と定め赫黃袍を身に着し自ら齊天大聖と稱し一ッの大旗に此四字を書記し洞門に おかし立天兵もしも押來たらば只一息に討破らんと勢ひ猛にまち居たり此時天上に孫悟空職を捨て下界へ出奔せし事其儘よ打捨うたしとて文武の仙卿詮議の上はやく追討あるべきよ一定し托塔李天王と其子哪吒太子を降魔大元帥とあし下界に向ふて進發ある李天王の先鋒巨靈神眞先よ宣花斧を提水簾洞に駈來り魔賊孫悟空いづくに在るや李天王が部下巨靈神將追討のため爰よ來れりはやく出て勝負を決せよと大音よ呼れば悟空其時鎖子黃金の甲を着し如意金箍棒を提あまさの猴を引頭門外よ走り出巨靈神よ向ふていふ你無用の言を費さずして早く天上よ歸り玉帝に奏して我を齊天大聖の官に陞さば我亦軍兵を動すまじ若是に順はずんば靈霄寶殿に打上り玉帝を追落し我其位にかわるべし巨靈神是を聞て大きに怒り斧をまはして斬てかゝる悟空件の如意鐵棒を振りて迎へ戰ひいまだ三合にあらざるに巨靈神が宣花斧眞中より打をられ心魂さ本陣さして逃歸る哪吒太子是を見て忽ち三身六臂の形と變じ斬妖劍　砍妖刀　縛妖索　降妖杵　綉

毬兒　火輪兒の六般の兵器をたづさへ悟空を目がけ打てゝ〻る悟空もまた三頭六臂と其身を變じ如意棒を三條に分けむゝえ進んで闘ふ事半時ばゝりいまだ勝負も見えざる處ゝ悟空一根の毛を拔て忽ち變じて我身とおし前面にありて哪吒と戰ひ正身の悟空ハ哪吒太子が後ゝふまハり如意棒を上て左の肩をはつしと討バさしも勇猛の哪吒太子こハ叶ハじとやおもひけん是も本陣へ逃入たり大元帥李天王是と見て大きゝふ驚き集ゝくのごとき神通あり急ゝ征せん事あたゝふべゝらず一先天上に歸り評議の上加勢を乞ふて再び是を討べしとて遂ゝ太子と共ゝ軍勢をまとめ天上ゝ歸り去ゝ〻と奏聞すれバ玉帝も殊ゝおどろき給ひ離ゝ李天王を助て此魔賊を捉べきやとありけるゝ太白星すゝみ出て奏して曰く只今加勢をもつて急ゝ攻打給ふともたやすく勝利を得ん事覺束おし先渠ゝ望ゝまゝせ齊天大聖の官をあたへ此所ゝめしよせ養ひ置給ふ時ハ天地の間永く靜謐ゝしんべし玉帝此議ゝ從ひ給ひ重て太白星を勅使として下界ゝ向て遣し給ふ太白星則ち水簾洞ゝ來り悟空ゝ對面し我玉帝に奏し星下を以て齊天大聖の官を請受〻り早く天ゝ上りて此官を拜受しゝ得とゞけれバ悟空是を聞て撃だよろこび再たび太白星に去たゞひて天上に赴きける

亂二蟠桃一大聖偷レ丹
反二天宮一諸神捉レ姪

さる程ゝ玉帝君ハ孫悟空を封じて齊天大聖とし蟠桃園を權官どらしむ此蟠桃園といふハ三千六百株の桃の木を植られたり前の方一千二百株ハ花微菓もまた小さし三千年に一たびみのる是を喰ふ者ハ仙道と成就す中の園にある一千二百株の桃ハ花層ひらきて實もまた甘し六千年ゝ一たび熟す是を喰ふ者ハよく長生不老よく雲に上りて飛行す殺の一千二百株ハ紫の紋もへきの核あり九千年ゝ一たび熟す是を喰ふ者ハ天地と齊を同ふし日月と

年をともにす悟空これを聞て一日衣裳と拔てかの樹上ゐうき登り熟せし菓とわくまで偷み喰ふ此時玉帝の御后王母蟠桃會をおして天仙をまねき給いんとて七仙女ゐ仰て桃の實を摘せ給ふ七仙女おの〳〵花籃をたづさへ桃園に來り齊天大聖ゑ告て園ゑ入るべしとてこゝうして尋ねけれども悟空いさらふ見へず只冠裝束のみ樹下ゐ脫捨たり仙女どもせんかたなく樹の下ゐ立より多くの桃を摘たりけるに此時悟空い其長二尺計の小猴と變じ桃の實に喰飽て南の枝の木の葉隱れゐ眠りゐたりしが物音ゑ目覺め俄ゐ本相を現し耳の內より例の金箍棒を掣出し大音ゐて你等何者おれが桃を偷むや我悉く討殺すべしと罵りければ仙女等大きにおどろき地ゐ跪づきてゆけるい大聖怒りを息たまへ只今王母蟠桃會をおし給いんとて我徒らに命じて桃の實を摘せ給ふ先ゐ大聖をたづねて告ゆさんとおもひしかども大聖更に見へ給いず刻限の遲おりつらんと押て園ゐ入侍ひぬ希くい罰を免し給へ悟空が曰く王母會をおして誰人をうまねき給ふぞ仙女の曰西天の佛老菩薩聖僧羅漢南方の南極觀音東方の崇恩聖帝北方の北極玄靈中央の黃極黃角大仙其外八洞の尊神ことゞく集り給ひいおり悟空の曰く我い是齊天大聖の官仙猶ゑおゐて至らざる所おし然るを王母この蟠桃會ゐ我をまねき給いざるい何事ぞや你暫く此所にありて吾消息を待べし則ち定身呪を唱へ仙女ゐむりい住まれ〳〵と叫るほどゐ七仙女皆樹の下ゐ身をよせてさらゑ一歩もうごく事あたわず悟空急ゑ雲ゐまたがり寶開瑤池ゐ行て見るゐさま〳〵の珍味いろ〳〵の嘉肴うづ高く積みおらべ右の長廊ゑ酒甕多くうさね數十人の官人傍らゐ並居てこの酒肴を護り居さり悟空このありさまをとくと覩が ひ身の毛二三十根を拔て口中に入れ噛碎きて噴出すに忽ち多くの睡眠蟲と變じ守護の官人ゑ向ふてとびうゝれば不思議おる哉一人も殘らず臥倒れてねむり入さらに前後を知るものおし悟空則ち走りよつてうの酒肴を引ちらし意ゑまうせて飲酩酊ゑ乘じて走り出齊天府へといそぎしがいうゝして道を踏たがへけん兜率天ゑぞ至ける此所い太上老君の住給ふ所おるが折節老君法を說給ふに仙童等聽聞ゐ出て一人も門を守るものおし悟空折よしと覩ひより仙家の寶とする九轉の金丹を葫蘆の中に納五ッまで貯へたり悟空此金丹を傾けことゞく喰ひ盡し今い我身の罪科重おる上い玉帝よりゆるし給ふまじと心ゑ思惟ー忽ち隱身の法をつうひ西天門より走り出て一參に華果山へこそ歸りける此時天上ゑい玉帝悟空が罪を犯したるを誅ー給いんとて十方の天兵を發し下界に下し給ふ其

先陣の大將九曜星眞先よ水簾洞ゐおしよせ孫悟空いづくよある早く來つて我と戰ひを交へよと大音に呼いれば孫悟空も如意鐵棒を眞向にさしゐざし門外よ躍り出九曜星と二十余合戰ひしゞ九曜星終ゐゐいず本陣へ引入たり是を見て天軍よい四大天王二十八宿隊を別ち備へをゐため悟空をめゞけ押來れば悟空もまた味方と下知し獨角鬼王七十二洞の妖王をはじめ數萬の群猿を率て陣を對し相かゝりよゐゝり喚き叫んで戰ひけるゞ鬼王妖王等打ぜけて殘らず天兵ゐ生どられ衆猿どもさん〳〵に成て水簾洞ゐ逃ゐへる悟空い是をこと〳〵もせず四大天神托塔哪叱と相手とし火花と散して戰ゐひしゞ遙間を見て一把の毛とぬき百千の悟空と變じめい〳〵鐵棒をふりまわ一群ゞりゐゝつて打立れども〳〵の天神さゝへゐねば四度路ゐおつて引退く悟空もまた强ちよ是を追ず毛と集て身ゐ改め明日の軍にい大神通をつゐひ天將を生捕べーとて其日い水簾洞にぞゐへりける

觀音赴レ會 問二原因一 小聖施レ威降二大聖一

此時南海の觀世音菩薩其弟子惠岸行者を引つれ蟠桃會ゐ赴むき給ふに悟空會を亂し犯して只今合戰の最中なるを聞給ひ惠岸を遣はして軍の動靜を見せしめ給ふ惠岸門はち鎖棍携さへ華果山に來り自ゐら轅門ゐ出て悟空を見る其時悟空も衆猿の中より如意棒を打ふりをどり出惠岸を目ゞけて只一打と討てゐゝる惠岸元來勇猛不双の手だれあれば同じく鎖棍さーゐざし半時計も戰ゐひしゞ惠岸終ゐ敵する事あたいずおれも本陣さーて引退ぞく此時玉帝の令甥顯聖眞君灌江口ゐおわーけるゞ加勢のためとて本部の神兵を引領し應をすへ大を率せ華果山ゐ來り玉ふ四大天王李天王いそき出迎て對面ー軍の次第詳らゐよ述られければ神君笑ふて此妖魔いゐよ神通を得たりとも我ゐおらず擒とすべし四大天王い我戰ゐひ接るとき四方をゐこみて逃る敵を打とるべし托塔天王い空中ゐ在て照妖鏡をもつて渠ゞ隱る所を照し給へと手分すでに定りければ眞君みづゐら神兵を引て水簾洞へおしよせ聞の聲を上たりける悟空列の鎖棒を打ふり一言の問答ゐも及ばず眞一文字ゐ討てゐゝり眞君と相ひゐへ戰ゐふ事二時ばゐり更よ勝負も見へざる處よ眞君大神通の天將あれば一たび身を搖ゐすと見えしゞ其長高き事萬丈餘り綠の面くれおいの髮上下の牙長く生違ひ三尖利刃鋒を擧て只一打よ打んとす悟空また神通をつゐひ眞君とおおじさまの萬丈の貌と變じ鎖棒をまじゑまた戰ふ事一時餘り時ゐ眞君陣中より數多の鷹を放ち犬を追ひてひれ猿を追立るよ猿

ども大きゐ驚き懼れ四方へばつと逃散たり悟空是を見て心愕ろき急ゐ法象を收め本相をあらわし水簾洞へ逃入らんとす四大天王かねて四方をうこみたれば是ゐさゝへられて洞中へ入事あたわず如意棒と變じて綉花針とあし耳の中へ納め身を變じて雀とあり木の梢に飛上る眞君是を見て其身を鷹と變じ同じく飛んで撲んとす悟空又大鳥とありて天ゐ上れば眞君もともに大鳥とあつて是を追ふ悟空水ゐ入て魚とあれば眞君忽ち魚鷹とあり悟空蛇とあれば眞君鶴とあつてこれを尋ぬ悟空今わ詮方なく一座の土地廟と身と化たり眞君見て此はこら前の戸閉わ渠ゞ口あるべし此所を開らんとせば我手先を噛傷るべし上の方ゐ二つの隱ゐるわ必ず眼あらん一打ゐ打て潰すべしと拳を上てうゝんとす悟空此時大きゐ驚き眼をつぶされてわらゐまじと急ゐ身をのがれて空中ゐ飛上り跡うたもなく失たりけり

前章之下

扨も孫悟空わ顯聖眞君ゞ大神通ゐ責討れ空中ゐ飛で行方を隱したり此時眞君李天王ゞ在す所ゐ來り悟空ゞ在所を問給ふ李天王頓て照妖鏡を擧て四方を照し見大きゐ笑ひ此猴園を山て眞君の住給ふ灌江口へ逃れ行たり眞君是を聞て忽ち中天へ身を躍らせ灌江口へ急ぎ給ふ

其時悟空わおのゞ身を眞君に變じ廟中に座してありけるゞ眞君の回給ふを看て如意棒を拿て馳出たり眞君わのゞすまじと追討給ひ俱ゐ華果山へ立歸り追つかへしつ戰うふたり此時天上ゐわ玉帝みづから軍の形勢を見給わんとて觀音菩薩太上老君を伴ひ南天門ゐ出御わり遙に下界を見をろし給へば李天王哪吒太子わ照妖鏡を擎て空中ゐ立給へばもろ〳〵の天將華果山の四方を十重二十重にとりうこみ眞君と悟空わ眞中ゐありて相戰ひいつ果べきとも見えざりけり觀音菩薩これを見て携へ給ふ水瓶を悟空ゞ頭に投的んと一給ふ時に太上老君おしとゞめ給ひ水瓶原來磁器ゐれば渠ゞ鈸榜に打あてたらんゐわ忽ち微塵ゐ碎くべし我一箇の圓子を持てり是を金鋼琢とも又金鋼套とも名づけて不思議ゐる寶貝ゐりあれをもつて此猴を打べしとて下界に向て拋下し給へばあやまゐず悟空ゞ頭の正中に撲的と中ればさしもの悟空足をもためず眞うつむけゐ倒れたり其時眞君の細犬飛來りて股を咬えて引たをせば四大尉二將軍眞君と共ゐをりうさゐつて遂ゐ悟空と高手小手ゐいましめ琵琶骨を穿ふたゝび變化する事を得ざらしめ師をまとめ上天へと歸陣し給ふ

八卦爐中逃二大聖一　五行山下定二心猿一

さるほどゐ玉帝君い孫悟空ゲ罪さわまる上いよろしく斬罪に行おふべしと大刀鬼王ゑ命じて斬らせ給ふゑ只刃の缺損するのみにてすこしも悟空ゲ身ゐ傷つく事おし是ゐ依て太上老君の御計ひとして悟空をとらへて乾坎艮震巽離坤兌の八卦爐中へおし入れ數多の道人ゐ命じて是を燒せらる悟空則ち巽宮ゐ潜り入しゲ元來巽い風おり火おしといへども大風烟を吹うけ眼を開く事あたいず両手ともつて眼をおさへ息をつめて潜みゐたり既ゑ四十九日を過てもろ〳〵の道人相集り爐をひらひて丹を取出さんとす其時悟空身を躍らせて爐中を走り出耳の中より如意棒を擧出しあたるを幸ひに薙立れバ亦是ゲ爲に天上混亂する事大うさおらず爰ゐおゐて祐聖眞君自ら三十六員の雷將を引卒し靈霄殿の前ゑ戰うふ事半日計悟空すてしもひるむけしきおく身を變じて三頭六臂とおし如意棒を三條ゐ變ト勇を奮ふて戰へバあまたの天將此勢ひゐあたりゲたく戰ひわゲみて見えゑけり此時西方の釋迦牟尼如來迦葉阿難の二尊者を引つれ靈霄殿ゑきたりたまひ天將を呼て戰ひを止させ給へバ悟空もまゑ法像を収め本相を現じ如來の前ゐ進みより聲を厲し罵つて曰く你何所の者おれバ爰ゑ來つて我戰うひとさまたぐるや如來是を聞て笑ひ給ひ我い西方極樂世界釋迦牟尼尊者南無阿彌陀佛おり你ゲ天宮を鬧すを靜めんため此所ゐ來つたり抑你い何おる道を敷修し得たるや悟空ゲ曰く我い天地生成の老猿華果山水簾洞の主おり不老長生の法を學び雲に乘風ゑ御し一瞬ゑ十万八千里を往く如來の曰く你我掌の中ゑのぼりてよく此中を跳り出んや悟空大きに笑ひ如來いうおれバうく獣子おるや我通力八十萬余里を飛行す然るをいわんや你ゲ掌の中におゐてをやと云も終らず如來の掌の上に躍り上り白雲を起して是ゐ打乘り八九万里も飛行せしゲその所ゐ赤き大ひおる柱の五根まで おらび立たり悟空此柱の許ゐ立て一根の毛を拔て筆と變じ正中の柱に齊天大聖到此一遊すと書記しまた雲を飛で如來の御手ゑ立うへり我已ゐ八九万の遠さ國ゐ至り五根の柱に記號を留め回りたり如來其時大きゐ罵つて曰く你野猿の徒ら何事をう修し得たるや先より我掌の内ゑれみ往來して敢て躍り出る事あたいず你ゲ五根の柱と見して我指おり疑いしくい此指を見よとの給へバあやしみさしうつむきて是を見れバ如來の右の御手の中指ゐ齊天大大聖到此一遊すと我筆跡ゑて書付たり此ゑ至て悟空大きゐおどろき急ぎ掌の中を飛下らんとせし時如來忽ち手を翻して手中ゑ提げ西天門より出給ひ五指を化して五行山とおし悟空を山の下ゑ押入れ唵嘛呢叭嘑吽の六字を金書ー

たる札を山の項よはり付給ひ土地神祇にお〳〵せて悟空を守護せしめ饑時い鐵丸をあたへ渴する時い銅汁を呑しめ渠ゞ災ひ充て人の救ひ出すを待しめ給ふ

我佛造レ經傳二極樂一　觀音奉レ旨上二長安一

光陰流る〳〵ごとく日月梭を擲るより猶はやく既ゐ五百余年を經たりわる時如來西天の雷音寺ゐ在して法論經の三藏を南贍部州ゐ傳へんとて觀音菩薩を召して錦襴の袈裟九環の錫杖並に三ッの緊箍兒をあたへて東土に到て三藏の經を取るべき人を尋めしめ給ふ觀音菩薩謹んで令承し其弟子惠岸とめしつれ東をさして立出玉ふ程なく流沙河といふ大河の岸よ至り玉ひ其河幅の廣大なるをなゞめておいしけるよ忽地此河水山の如く岸上りそのかさちおそろし氣なる妖魔の手ゐ寶杖を提波と蹴立て岸よ上り菩薩よ向て飛り〳〵れゞ惠岸面前ゐ立ふさゞり何者なるぞ不禮なりと罵れゞりの妖魔答ていふ左いふ汝いいりあるものぞ惠岸の曰く我い托塔天王の二太子木叉惠岸是よ在すい則ち我師父南海觀音菩薩なり妖魔是を聞て大ゐ驚き寶杖を投て菩薩の前ゐ躍づき謹んでやけるい我い原天上靈霄殿に有て推簾の大將なりしゞ玻璃の盞を打碎きし罰ゐよつて鞭打る事八百遍ゐ下界ゐ遂下され此河中ゐ身を安づめ常よ食乏しく飢よくるしみたま〳〵往來の人あれゞ是を捉て食とおす今も菩薩の來迎と云ら寸凡胎の僧ありとおもひとらへて喰わんとおもひしこそ罪ふりくもおろかなれ唯望らくい大慈大悲の菩薩あわれみと憐れ給ひ我此くるしみを救ひ給いゃ生々世々の大恩わする〳〵期あるべうらずと泪瀑布なして告まゐらすれゞ菩薩も憐れとおぼしめし你天上にて罪を犯し下界ゐ來て殺生をりさねゞさらに滅罪の期あるべからず我今東土に行て經をとる人を請めんとす你早く善果に歸〜てりの經をとる人の弟子と成西天に來て如來を拜せゞ其時罪を免されてふた〳〵び本職に歸るべしと宣へゞ妖いよ〳〵淚を流しさるにても我惡を積し事のあさましさよ我此河水に居をゞてよりこのりた經をとらんとて愛に來る人九人ゐり我ことゞく捉へてあれと喰へり扨も其九ッの頭顱いりゐすれども水中に沈む事なく只羽毛のごとく浮みたゞよふりくのごとき我ふるまひつたへ聞ゞ只恐らくい此後經をとる人此處へ來るべうらず菩薩打笑ふての玉いく你りあらず是を憂る事なりれりあらず經を取る人有て此所ゐ來るべし且水中に沈ざる頭顱いおのづから用る時あるべき間你ゞ首よりけて經をとる人を待べしとて則ち法名を沙悟淨と賜り雲ゐ登て東へ飛行玉へゞ妖魔再拜して

恩を謝し水中に入て時の至るを待ゐたり爰に又ひとつの高山あり兩陵山と号す山中に洞あり雲棧洞と名付く此洞に住妖魔あり面い豕のごとく手に一柄の釘把を執て狂風を發し土砂を飛し忽ち菩薩の御前に駈來る惠岸是を見て鎖棍を打ふりさへぎり留て相戰ふ彼妖魔戰ひあぐら聲を上てそも你い何くの僧ぞや惠岸が曰く我い南海觀音の弟子惠岸なり只今師父の御供奉して東方に赴くはやく路をひらき通し奉つるべし妖魔是を聞て持たる釘把をうちすと投すて再拜して菩薩無禮の罪を恕し玉へ我いもと天河の管天蓬元帥にてさひらひしゲ酒に醉て嫦娥に戯れ玉帝の怒りを蒙り此下界へ逐放ち玉ひしに我其時誤つて道を踏錯へ割らずも猪の胎中に入て今うくのごとき形になれり扨も身に賬いす業もなき僧に常に人を取り喰ひて日を過し候哀れ此惡行をいうよして止候いんや示し教玉へうしといふ菩薩聞て宜しく你うくのごとく惡心を改めずんば日々に其罪深くして更に正果を得るの期あるべからず此後東土より經を取んゲ爲に西天に至る人此所に來るべし你其人の弟子となり供に西天に至りて佛を拜せば災悉く消滅し樂界の生を得べしとて是にも法号を賜ひて猪悟能と名付玉ふ妖魔喜ぶ事うさりなく禮拜して洞中に立歸れば菩薩さに東に向ていそぎ玉ふ爰に又一條の龍あり空中に在て菩薩を見て叫ぶ事甚だし菩薩見給ひ你いづくの龍なれば爰に在て罪を受るやと問給ふうの龍答て曰く我い西海龍王の子にてしが殿上の明珠を燒たる罪によつてうくのごとく虛空に吊上られ日ごとに鞭打ること三百このごろに誅せられんとす希くい菩薩我命を助け玉へ菩薩是を聞玉ひ則渠がいましめ解き許し你白馬と變て師を取人になたゲひ西方に至りて功を立べしと云給め洞水の中に放ちやり玉ふ扨其所すぎて東の方を看玉へば遙に山の上に金色の光り輝きたり其時惠岸菩薩に向ひて申けるいあの光り立候山こそ蟠桃會をうき亂したる齊天大聖を如來の封じ置玉ふ五行山なり金字の黑帖歟かしこゐあり師父立よりて看玉ふべし菩薩則其言に隨ひうの山上に至りて帖子を見玉ひ一絶の詩を誦し玉ふ

堪歎妖猿不レ率公　當年狂妄逞二英雄一
自レ遭二我佛如來困一　何日舒伸再讃レ功

うく歎じて山を下り悟空ゲ在所をたづね玉へば土地山神都て出迎悟空ゲ居所に導き奉つる悟空原來石の匣の中に歷へられ手と口とに働けども身い一分も動く事あたいず菩薩立より

て你我を見知りたるやと問玉へば悟空面を上げ我よく你を見知りたり南海普陀落迦山の大慈大悲の南無觀世音菩薩にていあらさるや向に如來我を此山に壓へ置き已に五百餘年を經れども敢て一人も尋ね問ふ者あし我今前非を悔み此罪業を免れんと乞ふ願くは大慈悲を垂れて我苦患を救ひ給へ菩薩是を聞て驚して宜いく我今如來の仰を蒙り東土大唐國に至たり經を取る人を尋ね此人を得ば你其が弟子と成りて西天に至りて我佛門を修行すべしうから十罪業免れ極樂の果を得べし悟空の曰く我何事に於ても菩薩の仰に隨ひ車つらんはやく經を取る人をさがねて此所に至らしめ給へと互にうたき契約とし菩薩は東の方へ飛去り給ひしが大唐國に至り給ひ師弟もろとも狐狸の避僧と彷ちを變じ長安城に入て西天に赴くべき人を尋ね給ひける

陳光蕊赴任逢災　江流僧復讐報本

抑も長安城といふは周秦漢よりこの方歷代帝王の都にして眞に龍盤虎踞の上邦なり唐の太宗皇帝貞觀十三年丞相魏徵が勸めより天下に詔のりして儒流明敏の者は軍民に勉ちす長安城に來つて應試せしめ給ふ爰に江州の人に陳萼字は光蕊といふものあり學は五車に富文は七步に成る長安に來て應試し選ばれたりて狀元を賜ひ江州の國主に擧せられ丞相殷開山の女温嬢といへるものを娶り夫妻ともに故鄉へかへり其母張氏を勞さへて江州に赴らんとす其途に萬花店といふ所に至る母張氏仮染の病に染み立事あたはず光蕊母に食を勸めんとて鯉魚一口を買て斬て煮んとす然るに此鯉眼より金光を放ち一身金色にしてよのつねの鯉魚にあらず光蕊あやしみて江湖の中に免し放たしひ扨も數日母の病をいたわれどもはらく去く快氣のあらされはうくて數日を經りなば又公けの首尾もよろしからしとて其處に一軒の房屋を賃て母を留め留宿の主に劉小二といへる者によろづあつらへ置き其身は妻の温嬢を引具して江州へといそきける其道中に洪江といふ大川あり渡りの船をもとめて夫婦とも手を携へて船に上げるに稍水劉洪李彪の二人温嬢の美色を見て忽ち惡心を發し川中へ船を出し終に光蕊を打殺し屍ねを水中に沈め歎き呼び温嬢と引つれて心の儘に妻と稱し劉洪自ら陳光蕊と名乘り江州に赴き國主の任に着きにけり温嬢は深き恨みを心に藏し折を見合夫の敵を討んものと仮に劉洪にしたがひぬさるほどに洪江の川中に通海夜叉光蕊が屍ねをとりて龍宮に歸り龍王にうくとり上れば龍王其屍ねをよく〳〵見て是は

頃日我を救ひ助けたる恩人あり何故に川中ゐ殺されたるや此命を救ひて前日の恩を報せばやとて頓て光蕊ゲ魂魄を求めて你い何所の人又何故ゑ爰ゑ來て殺されたるやと問ねれバ光蕊ゲ魂答て曰く小生い陳光蕊とヤて海州の者あるが及弟ゐ遇され江州ゐ赴く處此川のわたしもり劉洪我妻の色よまよひ我を打殺して妻を奪ひて遁げ去りたり龍王われみを垂れて我と救ひ給へといふ龍王聞て先生ゞ心を安じ給へ足下前日放し給ひし金色の鯉い我あり此恩と以てゥあらず先生を救ひ參らすべしとてゥの屍ねの口中ゑ定顔珠を含ませて龍宮ゐ書へ暫時と待て魂ひをゥへし其仇を報せしめんとす光蕊恩を謝して暫く龍宮城ゑ止まりける

前章之下

陳光蕊ゲ妻温嬌いゐもひ設けぬ賊手ゐ陷りくるしき月日を過しけるゲ此時既ゑ光蕊ゲ嵐を身ゐ胎しぬれバ此子出生の後い海河へも身を投て死をいさぎよくあさんものとこゝろを定め劉洪ゐ身をまゥせゐもいず數月を送りける一日劉洪外ゐ出し留主の間ゑ忽ち產の氣つきて悶絶し玉のごとき男子を生めり此時夢ともあく現ともあく耳のほとりに人聲ありて吾い是南極星君あり觀音菩薩の仰を受け此兒を你ゑあたふるあり後ゥあらず名を賜すべし且又你ゲ夫光蕊い龍王の救ひを得て今龍宮ゑ止れり夫婦相會して仇を報ふ時あるべしと云ゥとおもへバ驚きて正氣つきゑり温嬌奇異のおもひをあしよろこぶ事うぎりゐし去ゥるゑ賊夫劉洪うへり來り此子を見て早く殺んとす温嬌歎きさまゞ〳〵にすゥしゐだめ其命を助んとゥきくどけども賊更に是をゆるさず今い詮方ゐくさらバ此子を江湖の中ゐ去づめ魚の腹ゐ葬るべしと自ゥら小兒を抱へ江の邊りへ出けるが不思議ある哉一片の板岸の側へあゲれよりたり温嬌是を見て觀音菩薩を心ゑ念じ其板の上ゑ子をゥきのせ帶を以て縛

めつけ扨小指を嚙て血をゝつて父母の姓名事の始終を悉々くゝき記し小兒の脚よりけ再び
あゝ逢ふ時の證しにとて兒の左の足の小指を嚙で圖形を入れ性命を天ゝ任せ江の中へ押
流し襁褓をおさへて歸りけるゝ哀なりしゆりさまおり此兒水ゝ顯ひ流れよ引れ遂よ金山寺の
邊に繋れゝ金山寺の長老法明和尚ひろひ揚て名を江流と号人をたのみて養育せさせ給ひけ
るゝ藏よ年月の過る事東流の水よりも尚はやく江流己ゝ十八歳よおりしほどゝ則剃髮させ
て法名を玄奘と名づけ摩頂受戒し道心堅固に修行ゝける一時長老母の血書をとり出して玄
奘ゝおたへ給ふに玄奘見終て聲を放て大きゝ哭きいゝにもして母よ一たびめぐり合父の仇
を報せんとて長老にいとまを告げゝの血書を持て化緣和尚とおりて江州ゝ赴きける此時溫
嬌い門前よ出て四方の氣色を眺めゐけるゝ親子の緣の盡ざるゝるしゆや玄奘もまた門外ゝ
來りて抄化を唱ふ溫嬌則よび入て齋飯をあたへつゝ此僧の擧止言談を見るに亡父光蕊
ゝ物語りゝの血書をとり出して見せけれゝ溫嬌ゝとろき覺て上事いわんゝたゝく扨い你て
そ眞の吾子おれとて親兒一處ゝ相抱て啼泣す溫嬌ゝけるい賊夫劉洪此事を漏聞ゝうならず

你を殺すべしはゝ〳〵金山寺ゝ歸るべしとて玄奘を送りゝへし其後佛參ゝ事よせ度々金山
寺にまふで長老玄奘よ對面して事の次第をくいしく物語り遂よ玄奘を長安の都ゝ登し丞
相殷開山に依て仔細よ是を訴ふれゝ太宗皇帝詔のりして早く此賊を誅すべしと下知し給
へば殷開山自ゝら御林の軍六萬餘騎を引卒し江州よ進發し賊の衙とひし〳〵と取ゝこみ劉
洪李彪の兩人を生捕りむちうつ事各々一百李彪ゝ首斬て大路ゝ梟させ劉洪を引立洪江の渡
口に至り前年陳光蕊を殺したる處よゝおゝて活おゝら劉洪が肝を斬出し水中よ沈めて光蕊ゝ
靈を祭る此とき江中ゝい巡海夜叉これを見て忙ぎ龍宮へ走り來りゝくと報ずれゝ龍王やゝ
て光蕊を呼出し其魂魄を屍ねの內ゝ納め夜叉ゝ命じて江口へ送り歸らしむ玄奘溫嬌殷開
山の人々是を見て喜ぶ事限りおく互ゝ手をとりてはじめ終りと物語り唯夢の心地ゝて是非
を辨ゆるにいとまおし光蕊い即日萬花店の劉小二ゝ家ゝ來り母の張氏を伴ひ遂り俱ゝ長安
ゝ入て前後の次第遂一よ奏聞しけれゝ太宗皇帝大きに御感ありて光蕊を文淵殿大學士の職
を授け玄奘い洪福寺よ在て佛道を修行せしめ給ふ

老龍王拙計犯二天條一　魏丞相遺書託二冥吏一

長安の城下に両人の隠士あり一人は漁師にて名を張稍と云一人は樵夫にて名を李定と呼り一日両人長安の酒館にて酔を盡し涇河の岸に至りて相別んとす此時漁翁の帳稍樵夫の李定に向ひて申けるは古人いへる事あり明日街頭少二故人一你山に入らば虎の害を用心すべしもし你不慮の事あらば再び吾と倶に酒館に來て酔を盡し相逢のしむ期あるべからず李定聞て怒て曰く你何ぞや我を咀ふ事かくのごとくなるや我もし山に入て虎に害せられば你も又浪に遇て水に溺るべし張稍笑ふて云我は一生水をおぼるゝの患なし李定の曰く天は不側の風雲あり人は暫時の禍福あり你何をもつて水に溺るゝ患なしと決定したるや張稍の曰く長安城の西門に一人の賣卜先生あり我日ごとに此先生へ鯉魚一尾を送りて卜いを願みて其ことばにまたがい網と下し釣を垂るに百たび下して百たび得ものあり兼ては其日の風雨晴曇一ッとしてあたらざるとなし是故に賣卜先生あらん限りは我敢て水難の災ひなし李定これを聞て大に歎伏し復明日出會べしと約をなし双方へ別れにけりこの時涇河巡水夜叉岸のほとりにありて此物語を聞龍宮城に入て一々告訴たふ龍王これを聞て大きに憤ほり若くのごとくある時は水中にある處の吾眷属共ことゝく此賣卜が爲に捉盡さるべし我自ら長安城に至り賣卜者を打殺すべしとて劍を提躍り出んとすあまたの魚臣等推とゞめて申けるは大王今怒りを起して彼所へ御出あらばうあらず洪水ありて長安の人民を損じ上天の咎めと蒙り給ふべし只々方便をもつてうの賣卜を殺し給はんこそ然るべからんと諫めければ龍王も尤もと是に止またがひ身を變じて一人の書生となり只一人長安城の西門に至りまゝうしろに尋るに果して一箇の賣卜鋪有先生難は袁名は守誠と申て世に名高き賢士なり龍王鋪に立より明日の天氣いかんと問うらなふ先生則袖占一課して斷じて曰く

雲迷二山頂一霧罩二林稍一若占二雨澤一准レ在二明朝一

龍王の曰く明日何時に雨ふり水の増る事何ほどなりや先生の曰く辰の時に雲起り巳の時に雷鳴り午の時に雨ふり未の時に雨止み水を得ること三尺三寸零四十八點なるべし龍王の曰く你其とばに違はずんば我金五十兩を以て你に謝べし若も時刻相違尺すもわらばこの卜い鋪を碎のごとく打破り你が人をまどはす罪を糺すべし先生笑ふて我言一毫も違ひなば你が心に任すべしと互にかたく約諾して別れて龍王は龍宮城へ歸りけり時に上天より玉帝の勅書ありて龍王に命じ玉ふ其書に曰く

殺二命八河總一　　擊レ雷擊レ電行

昔濟二長安城一　　明朝施二雨澤一

うくのごとく明日長安城へ雨を降す詔のりよて魃鬼の前後うの袁守誠ゲ判斷と一毫も差ひあらざれバ龍王大きゑ驚き座世の中うゑる靈人のありけるゑ所詮雨を行ふ時魃を差へ水の增とを相違せーめ夫を罪ゑして此責トを失いずんバ水族の永き患ひあらんと風伯雷公雲童電母をめしあつめ事の子細を委しく命じ次の日また書生と身と變じ長安城ゑ至り雨の魃鬼を待居たりかねてたくみてしらへし事あれバ玉帝の命に違ひ巳の時ゑ雲を布き午の時ゑ雷鳴し未の時に雨ふり申の時に雨を止め水を得ると三尺零四十點袁守誠ゲ占と一時三す八點を違えたり龍王ゥの先生ゲト舗に來りものそもいわず招牌を打神き門の扉を蹈龍し大きゑ罵つて曰く你妖人今日の雨時魃尺すと〳〵く你ゲ占と相違せり你ゲ死罪を免すと袁守誠呵呵と打笑ひ我原來死罪あし你い却て死罪あり你い是涇河龍王の書生ゑ變じたるあり今玉帝の勅ゑ違ひ雨を降すの時刻を改ひ玉帝你ゲ罪の輕うらざると思て明日午の時唐王の臣下魏徵ゑ命じて你を斬しひ然るゑ返て吾を罵り辱しひるい何事ぞや龍王是を聞て大きゑ驚き先生あわれみを垂て我を救玉へ袁守誠の曰く你命を助らんと欲バ太宗皇帝ゑまみへて救をもとむべし龍王是に去たゲひ泪をおさへて退きける

前章之下

其夜太宗皇帝の夢ゑ龍王來りかなしんて申けるい吾上天の主玉帝の勅のりを背き其罪ゑ依て明日午の時陛下の臣魏徵ゲ爲ゑ斬候べしわれ慈悲の御心を垂玉ひ吾命をすくひ玉へとくれ〳〵も奏し奉れバ太宗此事を諾し玉ふとおもひて夢い覺たり太宗不思議の事ゑおぼしめし次の日魏徵ゲ朝に出しとゝめて圍棋て時刻を移し玉ふ時午の三刻ゑ當りて魏徵起まち頭を低て睡りたり少時ありて一人の官人龍の頭を提御前ゑ來つきて奏しはるい見今千步廊の南十字街のはとりにて此龍の首雲中より地ゑおちたり急ぎ獄覺ゑ備へ來ると奏聞す此時魏徵且驚再拜し[illegible]げるい上帝昨夜臣に命じてゑの罪を赦せし龍を斬しめ玉ふ然れども陛下勅を圍んで臣を去らしめ玉いざるをもつて今夢の中ゑ神を乘し雲中ゑして此龍を某ゲ斬殺せり太宗聞て驚き玉ふと限りあし其夜太宗の御夢ゑ龍王手ゑ我首を提出來り太宗を罵て曰く吾昨夜你と約して吾命を救わんとを諾し今日却て魏徵と[illegible]殺さしひ今

汝を引て閻王の廳下ゑ至り理非善惡を糺すべしと御手を執て引立んとする處ゑ一人の美人雲中より下り楊柳の枝をもつて龍王をはらひ除北の方へ去り玉ふ是則土地廟ゑ滯留まします觀音大慈悲菩薩なり太宗ゑぞろき夢覺給へど是より玉躰異例にまし〳〵御惱日々ゑ重らせ玉ふ文武の百官朝ゑ集り今いはや崩御の際と見へさせ給ふゑ魏徵御前に進みより奏しけるゝ臣一封の書を陛下ゑ捧奉らん陰司ゑ至り給いゝ鄭都判官崔珏といふ者ゑこの書を與へ玉へ今陰司ゑ於りて生死の簿子と掌ゼる役人ゑり渠うるらず其書を見て陛下を救ひ奉るべしとて書を封じて奉れゞ太宗これを取て御袖の内に收め給ひ卒然として崩ト給ふ其時太子をはじめ奉り文武の百官歎き悲しみ暫く白虎殿ゑおゐて梓宮を停め奉る

遊二地府一太宗還レ魂　進二瓜果一劉全續レ配

太宗皇帝の魂魄都を出てそこども知らぬ荒たる野邊を只獨りあゆみうねさせ給ふ折ゝ大唐皇帝暫く待せ玉へやと聲をかけてゝの鄭都判官崔珏御前ちゝくすゝみより謹で奏しけるゝ涇河龍王の事ゑ依て今日陛下此所へ來り給ふと承はり御迎の爲參りゐと演けれゞ太宗大きゑよろこび玉ひゝの魏徵ゲ書牒を取り出して與へ給へゞ崔珏ひらき見て再び奏しけるゝ陛下御心を安ド玉へ某しよきゑ計らひやゲて陽間へ回えし奉つらんと御手を捉てすゝみ行ゑ閻王の御迎として青表の童子二人幢幡寶蓋を取て道と守護すほどなく一つの城門に至り玉ふに一面の牌を掛て幽冥地府鬼門關と七字の金書あり此時閻王陛を下りて出迎へ遥ゑ森羅殿ゑ請し奉つり閻王先問て曰く陛下前日龍王の命を救わんと約し却て渠を殺し玉ふゝ何故ゑて候ぞや太宗答ての玉ふゝ吾ゝ龍王の命を救ゝんと計りしゝども誰ゝ知らん魏徵神變ありて夢ゑ化して渠を斬たりこれ朕の力の及ゞざる所ゑり閻王の曰くゝの龍王末生已前既ゑ魏徵ゲ手ゑ殺さるべしと我簿子ゑゝ書ゑるしたり然れども渠爰ゑ紛しをもとむるゑよりはる〳〵陛下を迎奉る誤つて我々をうらみ玉ふゑとて崔珏をめして太宗の御壽命をさづねけるに崔珏忙ぎ簿子を出して査べ見るゑ南贍部州大唐太宗皇帝注定貞觀一十三年と配したり崔珏大きゑ驚き急ゑ筆を取一の字ゑ二畫を副へ三十三年と改め閻王ゑ奉れゞ閻王是を見て太宗皇帝御壽命今より後猶二十年の寶算ありすみやかゑ陽間へ還し奉るべし但陛下の御妹壽永ゲからざるに似たりよく〳〵つゝしみ給ふべしとて朱太尉と崔判官兩人ゑ命じて太宗を送らしむ太宗閻王ゑ向つて再拜し朕陽間に還りて後瓜菓を送りて此恩を謝し奉

つるべし約束し遂ゑ森羅殿を出玉へバ朱太尉引魂の幡をとり崔判官ハ後ろゐ供奉し輪廻より出て地獄のありさまを一々ゐ看せ奉つる抑々十八層地獄といふハ或ハ火の坑ゑ落し或ハ舌を拔き皮を剝ぎ或ハ碓に入て是を搗或ハ腸たを抽て氷の中に身をくるしめ或ハ油ゑて煎あやめも去らぬ黑暗み地獄其外刀山血池阿鼻獄秤杵獄おんどさま〳〵刑場ありて犯せる罪ゑ去たゞひ罪人を呵嘖せる鬼どもの間おくいそゞしけおるそ世の人の惡行を積るさバうりゑこそそゃろゐ涙ゐくれ玉ふ爰を過きて金銀の橋を渡り玉へバ其傍ハらに奈何橋といへる罪人の渡る橋有り寒風吹て人の肌を烈血の涙湧かへりて天も供ゑ紅いをおし泣叫こゑ四方ゐ聞へ氣も魂ひも身ゑそハず太宗此所をも過行て狂死城にさしの〻れバ其途ゐ數万人の餓鬼どもむらゞのり集り我命を還せ我命を還せと叫び太宗を通し奉らず此時崔判官奏しけるハ陛下此道を快よく通らんとおもひ玉ハ〻此所ろゑ十三の庫あり内ゑ金銀を積貯へさり是ハ河南開封府の住人相長と云者の金銀おり陛下これを借用して餓鬼どもに施し玉へ太宗大きゑよろこびゐの庫より金銀ととり出させ餓鬼どもゑ分ちあたへ玉へハ皆悦びて道をひらき太宗を通し奉つる行先六道輪回の辻ゑ至り給へバ或ハ東西或ハ南北おのゞさま〳〵迷ひ行も陽間善惡の業因によれりといゝあれゐ見玉ひて遂ゑ貴道門より地府の境を出玉へバ朱太尉一疋の馬を牽來りて太宗をのせ奉つり陛下陽間ゐ歸り玉ハゝ先の餓鬼共が爲ゑ氷陸會をなして冤恨をすくひ玉へと云終りて飛ゞごとくゑ渭水の邊りゑ至りけるゞ水庭ゑり金色の鯉魚二ッうゐみあらハれ遠近をあそびたわむるゝを太宗馬を止めて御覽あるに朱大尉大きゐ聲を厲し你はやく陽間に還るべしといふうとおもへバ太宗の脚をとらへて渭水の底ゐ撲的と突落したり此時大唐の朝廷ゑハ文武の百官太子后妃ことゞくより逢ひ玉ひ涼暗の儀式おとととり〳〵執行ひ玉ふ折しも棺れ中より我を救へ〳〵と連りに叫玉へバ衆の官々驚き異み棺を開きて扶け起し奉つれバやう〳〵ゐ眼をひらき給ひ朕今馬ゑ乘りて渭水の岸ゑ立やすらひ鯉魚の戲るゝを見ゐたりしと朱太尉ゞ爲ゑ水中ゐ推落され已におぼれ死せんとせりと語り玉へバ衆臣皆曰く臣等先より此ゑあり陛下何の水に溺れ玉ふ事是あらんとてさま〳〵いれハり介抱し奉つれバ魏徵則ち大醫院をめして定魂安神の御藥をもゝめ奉つり其夜ハ百[illegible]出し翌朝ゐ至りて太宗皇帝遂ゐ御心地常ゐ復し金鑾殿ゑ諸臣をめされ陰司の次第を具ゐ物語りあり遂ゑ非常の大赦を行われ天下の罪人四百余人を赦しおのゐ

の家々ゐ還らしめ玉へい皆万歳を唱へ御代永久を祝しける

前章之下

均州の住人に劉全といふ者あり其妻李翠蓮といふ者自ら頭ゐりざせし金の釵を取て門前の僧ゐ親しむを怒りさま〳〵と罵り恥らしめけれバ妻あさましとおもひて遂に溢て死たりける劉全これを見て今更憂世の事のうとましく共に死せバやとおもふ折ゝら太宗皇帝陰司よて閻王に瓜果を送るべきよし約束ありて還り玉へバ命を捨てめいどよ赴き閻王ゐ瓜果と献ずべき者やあると普く天下をもとめ給ふゝの劉全幸いひの事におもひ長安に至り瓜果を持て陰司よ赴くべき旨奏聞しけれバ大宗ゝきりなく悦び玉ひやゞて劉全ゞ頭ゐ一ッの瓜果を頂かせ毒薬をあたへて死せーめ玉ふされバ劉全ゞ一點の魂魄瓜果をかしらよ載き地府森羅殿ゐ至り閻王に呈し奉れバ閻王大きよよろこび頓て劉全をめし出し陰司へ來れる由來をくわしくたずね妻の李翠蓮ゞ魂を呼で劉全よ對面させ生死の籍子を閲する供に蒔命いまだ盡ず鬼使ゐ命じて渠二人ゞ魂を陽間に還すべしと下知せられけるゐ鬼使申して曰く李翠蓮既ゐ死ーて日久し其屍ねを失ひたり何れの所へか魂を送り申すべき閻王の曰く唐王太宗の妹李玉英ゞ命を縮め李翠蓮ゞ魂を收ひべし鬼使かしこまり両人の魂を提長安城よ至り先劉全ゞ魂を其屍ねよをし入れ夫より内院よ入て玉英皇主を尋るゐ折しも皇主ゝ庭前の花を御覧ト快よく徘徊し玉ふゝ鬼使走り寄て推倒し魂を引ずり出し翠蓮ゞ魂を手ゝやく入れかへ陰司をさしてとび去りける太宗皇帝はるかよ此ありさまを見玉ひ玉英皇主こそ悶絶して死たるぞ扶よや〳〵とて自から庭に下玉へバ皇后宮嬪はしり出てさま〳〵よ介抱あれバ皇主漸々に蘇生玉ひ太宗を見て大きにおどろき抑你等何人なれバ我を此所ゐいざあひ來れるやゆるし玉へと逃出れバ太宗も甚いだ驚き玉ひ手を取て引とゝめ你夫何事を云や我ゝ你ゞ兄是あるゝ嫂あり恐るゝ者よあらずと宜へとも皇主更よ聞入れず我元來兄もあく嫂もあし均州の民李翠蓮といふ女我夫の名ゝ劉全とて太宗皇帝の仰を蒙り閻王よ瓜果を献じ陰司よて不側の對面をゐし夫婦もろとも陽間よかへり來りしゐ道よて夫劉全を見失ひ誤つて爰よ來れりかへさせ玉へと歎く所へ一箇の官人走り來り閻王ゐ瓜果を献せし劉全只今蘇生いたし朝門ゐ來り候と奏聞す太宗是を聞ていよ〳〵おどろき玉ひ則ち劉全をめし入れ玉英皇主よ相合すれバ皇主劉全を見て我夫何處にかくれゐ玉ひ

しやと走りよりてさめ〳〵と哭くほどに劉全もまた大きゐおどろき其聲い妻の李翠蓮ゐ似たれども其人い夢ゐだゐ見ぬいとやんとあき雲の上人何といらへまゐらすべき唯あきれゐあきれ果忙然として言葉あし太宗此始終を御覽ありて前ゐ冥途にて閻王の弄妹ゲ命こそ危かるべしと云しとバ今の不側ゐ的當りとて事の仔細を語り聞せ遂ゐ皇主を劉全ゐ賜いりけれバ夫婦もろとも悅ぶとうぎりあく恩を謝して俱に故鄉へ回りけり

唐王選レ僧 修二大會一

觀音顯レ像 化二金蟬一

爭ゐ河南開封府といふ所ゐ水を賣て生業とする相良といふ者あり妻の張氏と共ゐ深く佛を尊み命を繫ぐ食の外い一錢も家ゐ留ずてと〳〵く僧ゐ施し佛ゐ供養しさらゐ書へるもの一箇もあし時ゐ長安城より胡敬德といふ大臣太宗皇帝の命を受け數百人の人步ゐ敵多の金銀を荷ひもさせ相良ゲゐバら家の四方ゐうづ高く積うさね勅使なりとひしめくゐゲ相良夫婦大きゐおそれ門外ゐまろび出慄るひ戰き命を俟胡敬德相良ゐ向ひ主上太宗皇帝你ゐ借らせ玉ふ所の金銀を某ゐ命ゐて只今うへし給ふ也 で受収むべしと聞へけれバ相良再び仰天し野人原來貧賤ゐして むかしより一錢の貯へあし何ゲ大唐の天子へ金銀をかし奉るべき是い人たゲへにて候べしと申けるに敬德の曰く你何ゲ現在あらずして天子へ多くの金銀を借奉るべき你平常僧ゐ施し佛ゐ供養せる財寶陰司ゐ於て十三庫ゐ充々たり主上先ゐ冥途ゐ至り玉ひ其一庫の金銀をからせ玉ひ今其冥數を合て返し玉ふ者あり只よろしく是を受納むべしとありけれど相良更ゐ合點せず萬歲爺たとへ陰司ゐて金銀を借玉ふとも偖なる証據これあし吾命をめさるゝとともいいれあき金銀と得こそ受申まゝとて一向したがふ氣色なし是ゐ依て急使をもつてこの赴きを太宗皇帝ゐ奏聞すれバ太宗即ち渠ゲ爲ゐ寺院を建立し僧と乞ふて供養すべしと詔のりありけれバ敬德遂ゐ其金銀ともつて一大寺を建立し勅建相國寺と號し今も猶現然たり扨も太宗皇帝い閻王ゐ瓜菓を送り相良ゐ金銀を返し今い施餓鬼を終行して陰司の約束ゐ終るべしとて天下の名僧をまねきあつめ其中より選み出し玉へる壇主ゐい西方金蟬長老の轉世 佫奘禪師則陳光蕊ゲ子般開山の外孫あり此時貞觀十三年九月三日化生寺ゐ壇をひらき一千二百人の僧をあつめ施餓鬼の大會を執行ひ玉ふ然るに觀音菩薩い佫奘法師ゐ導主あることを聞玉ひ如來より賜りし錦襴の袈裟九環の錫杖を手づから持て木叉と俱ゐ芥癡の僧ゐ化し長安の東華門ゐ往て件の袈裟と錫杖を賣らんと呼いり給

ふ太宗両人の化僧を召して袈裟錫杖を看玉ふよ艶々と光りゝゝやきいづれも凡常の物ゐ伝らず依て求めて伝奘ゐ與へんとおぼしめし其價を問玉ふよ觀音答て宜いく袈裟の値五千両錫杖ハ二千両あり然れども陛下佛門を帰依し高僧を崇敬し給ふとのありゝたさゐ値におよバず献上し奉つるべしされどもゝの壇主の僧伝奘法師只小乘の法のみを知りて大乘の法をいまだ知らず今天竺國大雷音寺我佛如來の許ゐ三藏の眞經あり是則ち大乘の佛法ゐして衆生成佛の眞法あり陛下德行の僧ゐ命じはやゝかの三藏の眞經をもとめ玉へと宣へバ太宗つら〳〵是を聞しめされ你已よ大乘の法を知らず多寶塔よ上りて法を説ハい可おらん菩薩すこしも辭し玉ふ色なく本火と供ゐ蓋上よ昇り給ふと見へけるゞ忽まち金色の光りを放ち手ゐ淨瓶楊柳をさゝげ觀音菩薩の本相を現し玉へバ木火もまた鐵棍を執て御跡ゐしたゞひ奉つり白雲ゐ乘て西天へ還り玉へバ太宗ゞよりはじめまいらせ文武の百官僧俗男女大地ゐひれふし上天ゐ拜し南無觀世音菩薩と唱る聲しバしい鳴も去つまらず太宗忙き時の衙院吳道子を召され菩薩の眞形を寫さしめ玉ふ則今の世ゐ傳る吳道子ゞ觀音の畫ハ是ありけり扨も大宗皇帝係る奇瑞を見玉ふ上ハ一時もはやく高德の僧ゐ命じかの大乘の眞經を取來らしめ普く善果を終行すべしと宣ひけるよ伝奘すゝみ出て申けるハ貧僧不敏ありといへども願くハ生命を捨て西天ゐ赴き眞經をとり來るべしと奏聞すれバ太宗御感斜ならず二人の從者と白馬一疋を賜り吉日を選らんで首途をゐさしめ玉ふ伝奘法師恩を謝して都を立出ぬれゝ太宗皇帝もろ〳〵の官人と共よ關の外まで送り出たまい自手御盃を賜り勅して宣ふハ酒ハ僧家の制禁ゐれども此一杯ハ朕ゞ餞別ゐあり快よく飲はして別れの情を盡すべし且三藏の眞經を需め歸る你ゐれバ今より三藏と号べしと仰げれバ伝奘法師君恩の深さゐ落涙止めがたく太宗皇帝に辭謝し奉り衆人にわかれを告げ西方さして出行ける

陷虎穴金星解厄　　雙奴嶺伯欽留僧

さる程ゐ伝奘三藏ハ行衛ハかなき旅の空をそこともも知らず立出て白馬に跨ゞり從者二人を引具して數月を經て唐國の西の界河州の地ゐ着玉ふ此所の福原寺といふ寺院に一夜を宿りやく霜を踏み月に詠じとある高山よよぢのぼり玉ふゐ忽ち三藏白馬ゐ乘りあゝら從者二人もろともよ一ッの坑坎に陷いりたりこれいゝわゐせんとゐされたるに洞の奥ゐ聲ありてはや

く擒えて伴ひ來れと呼るほどに其うたちさまゞゝおそろしき妖邪五六十人出來り三人をとらへて魔王の前へつれ行たりおそるゝ頭を上て是を見るよ眼い電光のごとくこゑい雷ちの如く左右の牙するどく現れ鈎の如き爪を鳴らして掴み吃んとす時よ外面より接内して熊山君特處士來れりと焉りて二箇の怪物入來り何事ゐや物語り終り三藏ゞ二人の從者を引烈てことゞく喰ひ東方既ゐ明あんとする時ゐまたの妖怪何所ともあくうきけして見えずなりぬ三藏一人地よひれふし今や妖靈の爲に命を失ふうと人心地もあくおわしけるゐ忽然として一人の老叟天下り三藏ゞ手をとりて坑の外へ引連れ出扨老翁申けるい此所い雙峰嶺と号けて虎狼のあつまる所ゐり坑の中にありし魔王寅將軍とて山猫の精なり外より來る特處士といふい野牛の精熊山君い熊羆の精ゐり你ゞ本性元明ゐるゐ俠て吃ふとあたいず呑い西天大白星ゐりと云うとおもへゞ一陣の風よつれ白鶴よ乘りて西の方へ飛行たり三藏奇異のおもひをなし天ゐ向うひて禮拜し馬を牽てまた山中を半日斗あゆみけるゞわちゐそろし前面より二疋の大虎馳來たりゐるこゑ雷ちのごとし後の方よりい數十丈の大蛇口をひらき焰を吹て追來る三藏氣も魂いも身ゐ添ず今や命をとるゝと見る處ゐ不思議や虎も大蛇もわはて慌きたるありさまよて谷の蔭へ一參よ逃入たり三藏大きゐ怪しみうゝる狂獸惡蛇の恐るゝ者いいうなる妖怪にやと暗ぞのへして是を見れゞ一人の大漢手に鋼叉を拿腰ゐ弓箭をうけ山上よりあゆみ來る三藏再拜して活命の恩と謝し貧僧い大唐皇帝の勅を受西天よ往て佛を拜し眞經を求むる者ありと申玉へいかの漢士も禮を返し某しいこの山の獵師劉伯欽と申者なりすべて此山の虎狼其外の獸類我を見ていうならず恐れ逃走れり長老心を安んじ我家よ來たりて勞れを休め玉へといふ所よ忽ち山間より土風吹來り一疋の斑爛虎跳り出たり伯欽是を見て長老愛よて某ーゞ此虎を刺殺すを見給へと鋼叉をひらめうして前みよれゞうの大虎吼て爪と振ふて飛びかゝるを鋼叉を以て向戰うひ半時斗揉合しゞさしもの大虎力勞れ終に伯欽よ刺殺さる三藏是を見て大きに驚き足下の勇壯眞に鬼神のごとしと稱歎し伯欽に誘ゐいれ渠ゞ住家ゐ入り玉ふ伯欽ゞ老母大きに悅び幸ひなるうゐ明日い伯欽ゞ父の正當忌日に中れり今宵い我々ゞためよ佛事をゐして給ひ候へとて齋飲の用意とりゝいとゐみけれゞ三藏ねんごろよ讀經し翌朝また馬よ乘て立出玉へゞ伯欽便ち三人の家僮を引つれ後ゐ就て送り參らせ行事半日にして一箇の大山あり其高き事天とひとしく山路九折し嶮難い

ふばうりなし此山の半腹迄上りし時伯欽三藏に向ひて申けるゝ此山ゝ兩界山と申て東半邊ゝ唐朝の地西半山ゝ韃靼の地なり韃靼の地の虎狼ゝ我を見て懼る〳〵事あし故よ某し此坂を越しゞたし名殘いつきず候得ども是ゑて御別れ申べしと立歸らんとしけるを三藏馬より飛下扯留て復何の日ゝ相逢べきとて袂をとりて涙と流し別れゝねてぞおわしける

心猿歸レ正　六賊無踪

三藏と伯欽と既よ別れんとし給ふ時山の麓より我師父來り玉へ我師父來り玉へと呼るこゑ頻ゑ聞へけれゞ三藏ふゞろき何者ゝ〳〵くのごとく我を呼ぶやと異み玉ふゑ伯欽申けるゝ此山ゝ原五行山と号せしよ我大唐王兩界山と改め玉ふいにしへより傳へうけ玉ゝる濃の時天より此山を降し下よ一箇の猴を歷土神に仰て饑時鐵丸を喰せ渴する時ゝ銅汁を飲せ今ゑ到て此猴死せすと申傳候必定ゝの猴ゞ長老をまぬく物ゑて候いん試みよ山を下りて見申さんとて三藏を導き山下よ至れゞ果して石の匣の中よ一箇の猿有頭を出し手を延て三藏をまねき長老ゝ大唐皇帝の勅を受西天ゑ往て經をもとむる人あらずや三藏の曰く我乃ゝ是なり你是を問て何とするや猿の曰く我ゝ五百年前天宮を鬧ゞせし齊天大聖と申す者あり如來我罪あると以て此所よ押入れ敢て出る事をゆるし玉ゝず向ゑ觀音菩薩爰よ來り玉ひ經を求むる長老の弟子とあり西天まで守護ー功を立あゞ善果を得べしと教へ玉ふ師父憐みを垂て我をすくひ玉ゝゝ御供致し西天ゑ赴くへし三藏の曰く你ゝ〳〵る善心ありといへとも我いゝにしてゝ你を救ひ出さんや猴の曰くこの山の嶺さに金字の歷帖あり師父これを除き玉ゝゞ我即ち爰を出申べし爰に於て三藏伯欽と俱よ山よ上りて見玉ふゑ果して大石の正面に封皮を貼唵嘛呢叭嚩吽の六字を金書したり三藏近く立よりて禮拜し除き去んとし玉ふ時忽ち香風一陣吹來りその帖を虛空へ吹上西の空へ飛び行けれゞ三藏伯欽再び天を禮拜し山を下て西の所へ來たり玉へゞ向の猴大きゑよろこび師父爰を去て遠く退き給へ吾此所を出ゞ必ず驚ろき給ふべしといふ三藏伯欽則身をかへして東の方へ走り下給ふ時忽ち天地も崩る〳〵斗響き渡り忽然としてゝの猴三藏の馬前よ來つて再拜して禮をあす三藏問て曰く你名ゝ何と申すや猴の曰く我よ法名あり孫悟空と申す三藏の曰く此名我們の宗派によく合へゝ你ゝ〳〵たちと見るゑ小頭陀に似たり我又別名を孫行者と名つくへしとて遂ゑ師弟の契りをむすび伯欽よ別れを告げ西と東へ出行ぬれゞ孫行者行李を背後よ付進みける爰ゑまたとゑ

る溪間より猛虎一疋跳り出三藏ゑ飛り〻るを行者見て大きによろこび師父恐れ給ふ事あかれとて耳の中より如意棒を引出し虎ゑ向ふて只一棒に打殺し一根の毛を拔て尖刀とあし虎の皮を剝て身ゑまとひ如意棒を綉花針とあして耳の中へ收めたり三藏此始終を見て大きゑ驚き你いりゑしてりかくのごとき大勇神通ゑありや行者笑ふて曰く天地の間ゑあらゆる物我に敵する事決してあたハず就中只今遣ひし鐵棒ハ延す時ハ上天に達し縮める時ハ耳の內ゑ收む則龍宮より取來る處ゑり三藏是と聞てたのもしくかもひ馬をはやめて進み給ふさるゑても限りさためぬ旅ゑれバ或ハ野ゑ臥山ゑ宿りゑりし暮して往程ゑ冬の初ゑありけれバ物さびしさもいやまして枯野の中を心ぼそくも過行けるに忽ち路の側らより六人の剪徑わらわれ出手ゑ鎗刀を拿て路を遮ぎり命ゑしくバ行李及び金銀を我々が中へさし出すべし否あらバ斬て捨んと口々ゑ罵りけれバ三藏ふそれ驚き已ゑ馬より落んとす行者いそぎ扶け下し師父のあらずゑそれ給ふゑ我これと逐拂いんとてちり〻とすゝみより你等何者なるぞ名のあらバ名乘べしと云けるゑ銘々聲ゑ應じて名乘りける其一人ハ眼看喜一人ハ耳聽怒一人ハ鼻嗅愛一人ハ舌嘗思一人ハ意見慾一人ハ身本憂とぞなのりける行者笑ふて你等原來六個の毛賊我ハ你等が主人公ゑり貯へ置たる財寶あらバ取出して我ゑ與ゑ六人の賊大きに怒り鎗ととりのべ刀を擧孫行者を中にとりこみ八方よりたゝみりけて砍りけぬれと行者自若と立て毛の一根も砍とあたハず六人のもの目と目を見合せあきれ果てぞゐたりけり

前章之下

此時孫行者大きに笑ひ你等我一棒を受て試みよとて耳の中より鐵棒を引出せバ六人の賊等大きに驚き我先にと逃走るきたなし者どもと呼ハつて追詰め〻〻如意棒を振て一人も殘ら打殺せり三藏是を見て眉を顰わめ玉ひ剪徑の賊人源惡行の者といへども悪く死刑に究むる者ゑハあるべりらず汝いりんぞ都て是を打殺や行者の曰く吾今他を殺さぢんバ他却て我師父を殺すべし三藏の曰く我ハ出家ゑりたゞひ人に殺さるゝとも決て人を殺すことをなさず汝今既ゑ佛門ゑ入てりくのごとく暴惡を改めずんバ業果を得事覺束ゑし行者是を聞て心に怒り我西天ゑ至りても善果を得るとなくんハ師父ゑ別れて是より歸り去るべーと云より早く身と飜へし虛空ゑ揚り東の方へ飛失たり三藏もせんかたゑく頭を仰て東をゑがめ玉へども行者の形ちの見えざれバ行李をとりて馬ゑ負せみづから羅繩を引て心ぼそくも出往玉

ふ此時前面より一人の老女手に綿衣と花帽とをさゝげ出來り三藏を見て問て曰く長老何國へか赴き玉ふや三藏の曰く貧僧い東土大唐皇帝の勅を受西天に往て佛を拜し經を需んと欲する者あり老女の曰く西方如來の在大雷音寺と申すい爰を去る事十万八千里長老只一人いうでゝかしこに行着玉いん三藏の曰く前刻まで從弟一人召具し候得ども此者生得頑ゐして唯今吾を捨て東方へ飛さりたり老女の曰く吾も幸ひ東の方へ行者なれゞ御弟子よ逢ひて呼かへし參らすべし又此綿衣直綴と鐵金花帽とを長老よ送りあたへ候いんかの御弟子回り來る時直綴を着せ花帽をいたゝかせ我教ゆる呪を唱へ玉へふさゝび惡事とあす事あるまじきぞとて三藏の耳ゐ口をよせ定心眞言の呪文を授け長老固く忍ゐ秘して人ゐもらし玉ふとなかれ此呪文を緊箍呪と申し候て忽ち金色の光りを身より放ち東の空へ飛去りぬ三藏是を見て觀音菩薩の眞言をさづけ玉ふといとありがたく香を燒て禮拜し直綴帽子の二品と包袱の中へつゝみ行者の回るを待居給ふ此時行者い觔斗雲ゐ打乘り只一飛に東海龍王の許に至る龍王行者ゞ來るを見て禮をあして曰く大聖いかよして久しき難を免れ給へる行者の曰く我觀音菩薩の勸めに依て唐僧ゐ隨ひ西方ゐ致り經をもとめんとす此故を以ていましめを免かれたり龍王のいわく大聖邪まを改め正きに歸何事の悅びか是よしかんゑかし大聖西ゐ至らずして却て東海に來るい何の故ぞや行者の曰くかの唐僧心せまく吾剪徑の賊人を打殺したるを以て喃々と我を吃り候故打捨置て爰よ來れり吾再び水簾洞よ入て快よくたのしまんとす龍王の曰く大聖大きゐあやまれり今水簾洞ゐ歸り候ともやう〳〵妖仙の魁ゐして遂に正果を得るの期あるべからずはやく觀音のゐしへゐしたがひ唐僧を具して西方ゐいたり全き善果を得玉へとすゝめけれゞ行者さしうつむきて半時計按じ居けるゞ忽ち席を立て吾再たび唐僧を供ーて西に赴くべしとて龍王よ別れ飛去りけるゞ雲中よ觀音菩薩ゐ出合たり菩薩の宣いく你我教誨ゐたかひ何方へ走りたるや行者急ゐ禮をなして曰く唐僧我を嗔ゑ事きびしき故東海ゐ行て氣をのゞー候なり是よりまた御教のとく僧を供奉して西天に至り候いんとて觀音と相別れ須臾の間に舊の所へ歸り三藏の前に來り師父路を急ゲずしていつまで爰ゐ座し玉ふや三藏ゲ曰我い唯爰よゐりて你ゲ歸るをまち居たり抑你何處へか往たるや行者の曰く我東海龍王の家よ往て茶と飲て參りたり三藏の曰く你餓いりを云て我をゐざむく事あかれ暫時の間よ何ぞ東海よ至り來らん行者笑ふて師父吾雲よ乘りて一飛よ十万

八千里を行事を知り玉いず東海よ致る事何の問どりのこれわらん三藏の曰く你い是神通を得たり既に龍王の件よて茶を呑來れり吾い爰に在て甚だ饑たり你包袱をひらき中なる乾飯をとり出し吾にあたへよ行者かしあまり包袱をおしひらくよかの直綴と花帽あり行者両品と見て問て曰く師父此衣帽い東土より持來り玉へるの三藏の曰く夫あそ我幼稚時着せし帽子直綴なり此帽と戴く時い習わずして經と讀直綴を着すれば聞ずして體を知る行者の曰く師父此二品を我よ賜らんや三藏の曰く是い我身邊の寶具あれとも汝ゐ附屬し與ふべし行者先身よ直綴を着し頭ゐ帽子を戴きたり此時三藏老女の歌たる緊箍呪や口の中ゐて唱へ玉へば行者忽ちに倒れていいかよ何とて頭の痛むこと急あるぞや疼や〳〵と叫びつゝうぶりし帽子を粉微塵よ裂破れば中ゐ一條の金箍ありて取とも不下揪もと不斷金箍よ根を生して肉と俱につらありたり三藏も不思議ゐおもひ口を閉て呪を止め玉くい行者頭疼痛嘲て治し恰も平常のごとし爰ゐ於て行者大きよ怒り耳の中より如意棒を引出し三藏目ゲけ唯一打とふり上ぬれば三藏又口中ゐ呪を唱へ玉へば持たる鐵棒を大地ゐ打捨ゐゐ痛や〳〵師父ゆるさせ玉へ〳〵と聲を上げ頭をゥゝへ涕泣す三藏の曰く你今より心を改め我教を聞ばこれを赦さん行者の曰く我敢て師父の命を守り申べしさるよてゐ此法い何人より授り玉ひしやと問ふ三藏の曰く向ゐ一人の老婆來たりて我ゐおしへさり行者是を聞て此老女いかあらず觀音菩薩あらん吾を師父にそむかしめさる方便の計事ゐてこれわらん何事も由後い師父の教をそむき申すまじ師父もまた憐みを垂て呪を念へ玉ふ事あうれとて三藏を馬にゥきのせ後ゐ着て西方へいそぎける

蛇盤山諸神暗佑　鷹愁澗意馬收韁

さるほどよ三藏い悟空と俱ゐ數日をゥさぬ西の方へ赴き玉ふ頃い蠟月はじめつゥた朔風凜凜いと寒きよ山間の澗の中より忽ち數丈の龍あられ出涙をひるがへして跳來る行者是を見て忙三藏を馬より抱きおろし高き崖の上よ居らしめ耳の中より如意棒を取出し提て竈の所よ來りて見れば師父の乘りし白馬龍と俱に在所を知らず只行李のみ其所ゐあり行者大きにあやしみ立歸て三藏ゐ申けるい只今の龍を打殺さんとぞんし候得ども誰ゥ計らん師父の馬を吃ひて澗の中ゐ隱れたりと相見へ行李のみ殘りありて候某再びかしこに參り此惡龍をたつぬ出し師の馬をとりゥへし申べし暫く此處に待せ給へと云捨て出行を三藏袂を取て

とゝめ玉ひ你かしこゐ行たる跡へりの龍出來りて我を吃んもいりゞたし你決して此處を離るゝ事なかれと仰ける時ゐ忽ち虛空ゐ聲あつて長老おそれ玉ふとおかれ我聲愛ゐあつて急難を救ひまいらせん行者是を聞て左云ものゝ何者そや又虛空ゐ聲して我々ハ六丁六甲の神五方揭諦四値功曹護駕伽藍等觀音の命を受け經と求る人を守護せり行者聞て扨ハ是等の神將師父を守れり今ハ心を安じ玉へとてふさゝび淵のほとりへ走り行き翻江攪海の通神をつゝひ淵水をひるがへし泥水とのゝ濁せバかの龍たまり得ず牙をあらして跳り出悟空と戰ふ事半時ばかりさしもの大龍力勞れうおひゞたくやおもひけん身を變じて小蛇とあり蜷の中ゐかくれたり行者いよ〳〵怒り大聲を發し字掩呪語を唱へ土地の山神と呼出し龍の在所を尋ねけるゐ山神こたへて申けるハ此所の山を蛇盤山と号し此淵を鷹愁淵と申てむかしより曾て邪神住をなし原來淵水底清くして鴉鵲のさゞひおのれが影を群鳥とおもひ多く水底ゐ陷るともつて鷹愁淵の名ありさる淸き淵水あれバ黑龍の住べきいわれなし前年觀音菩薩一條の業龍を比淵ゐ放ち經と取る人と待しめ玉ふ只今觀音菩薩を請ひ來らバ此龍忽ちまち出來らん行者是を聞て南海ゐ走り行き觀音を請來らんとす此時空中ゐ在し金頭揭諦

の神呼で曰く大聖しバらく待候へ我南海に行て菩薩を請し來らんとて南をさして飛行しゞ暫時の內ゐ觀音をいざなひ蛇盤山ゐ立回る行者菩薩の來り玉ふを見て忽ち罵つて曰く你ハ是大慈悲の教主ゐしてなんぞ我をあざむき帽子を殺りてせ又唐僧ゐ緊箍呪とやらん呪をおしへ我頭を落しむる事ハそも〳〵何の慈悲そや菩薩の曰ハく汝佛門の教へに頼がハゐ若りくのごとくせざれバ再たび惡事をなして天上と鬧すべし是汝に正果と得させん我慈悲心ゐり行者曰く然らバ今此淵水ゐ黑龍をはあち陷我師父の馬を吃ハーめて西方

よ行く途を妨ぐるゝ是も又慈悲ありや菩薩の曰ゝく我此所に放し置し龍ゝ西海龍王の子なり向より此淵底ゝ在て經を取る人を待しめしに汝其經を取るを云ざるゝより渠ゝ去らずして馬を吃ひしゐちんとて揭諦よ命じてりの龍をよび出し柳の枝をもつて龍の渾身を拂ひ玉へゞ忽ち一疋の龍馬と變ずまた柳の葉三ッを摘て行者ゝ頭後ゝ置て三根の毛とゐし汝若大難ゝ逢たる時此三根の毛其災ひをすくふべし汝勉めて唐僧を守護せよとねんごろよ云合めたまひ南の方へ去り玉へゞ行者御跡を禮拜し龍馬を牽て三藏の前ゝ來り事の子細ゝつまびらかよ物語れゞ三藏南よ向かひ三拜しまた馬ゝ乘りて淵を渡り山を過ぎ西よ望んで瓈玉ふゝ紅日西ゝ沈み天色すでゝ晩ゐんとす路の傍らよ一ッの廟ゝり里社祠といふ大字を書て門ゝかけたり三藏馬より下て門内ゝ入玉ふゝ内に一人の老翁ゝり三藏師弟と見て齋飯を設け一夜と宿せしめ翌朝馬の鞍轡其外皆具をとり出して三藏よゝたへ供よ送て門を出けるゞ忽然として老翁の姿を失ふ時よ空中に聲ゝつて我ゝ落迦山の神ゝり觀音菩薩の命を受け馬の皆具を與ふゝりと云拾雲井ゝるりに飛去りけれゞ三藏忙ぎ空よ望みて禮拜し又馬ゝ轡うち西の方へ急き玉ふ

觀音院僧謀二寶 具一

扨も玄奘三藏孫行者ゝ西の方へ兩月餘り急ぎ玉ふよ已よ春の氣色のどやかよ霞さゐびき木草の色翠を帶て旅のゐれぞまさりけるゝや西番哈咸國を過ぎて遥に山の凹ぼの所に樓閣建てつらねたる寺院ゝり三藏りの寺ゝ一夜を宿るべしとてりしこに至り見玉ふよ正殿の屋上よ觀音禪院と大字して額をりけたり三藏馬より下り山門ゝ入て案内を乞ひ玉へゝ一人の僧立出て何處の人と問ふ三藏くわしく其來歷を語りたまへゞりの小僧三藏をいざゐいて方丈へつれ行けるゞ孫行者をつら〳〵見て世にもりゝる醜きゐのこのゐりけるよ恰も是猴の一般と密に心よゐもひつゝ遂ゝ方丈ゝ至れゞ院主和尚數多の僧し共に出迎て茶をすゝめ菓子を献しさま〳〵よもてなしまゐらする時ゝ一人白髮の老僧出來り三藏よ禮をゐし童子に命じ白銅壺を提三杯の香茶を三藏よ献んず三藏呑をわりて其器のうつくしきを深く誠玉へゞ老僧笑ふて曰く此器何ぞ賞翫するよ足らんや貴僧上國より來り玉へゞ定て此處ゝ珍らしき寶を持玉ひ候いん我よ一度見玉へのーと云三藏笑ふて貧僧いかでかさる寶具を持候いん時に行者進み出て曰く師父りの袈裟を見せたまへ院主の曰く袈裟のごときゝ此寺ゝ七八

百も所知し候へゞいかゝあるうるゝしき東西ありとも見るに望みおく候と云行者是を聞て忽ち行李をとり出し是を開かんとす三藏ひきとゞめて密語て曰く爾人と富を爭ふとあられ貪婪の人是を見ゞ必ず惡心を生ずべゝ行者の曰く老猿是ゝあり師父心を放し給へとて遂ゝ包袱を開かの錦襴の袈裟を取出せゞ其紅光堂ゝ滿彩色ゝ庭ゝ盈てり衆僧立寄見て感歎する事大ゝたならず老僧果して欲心を生し三藏ゝ向ひ申けるゝ我今年今月までゝ〻る紅光袈裟を見ず希くゝ一夜ゝして得と拜見あさしめ玉へと手を合せて乞けるゝ三藏ゝ答ふべき詞ばを知らず只默しておわしけるゞ行者打笑ひ爾ゞ數多の袈裟ありといへどもゝくのごとき光彩ゝあるべからず此夕一夜ゝ師ゝ請て爾ゝ借べし老僧大きゝよろこび遂ゝ後房ゝ入て燈火の下ゝ彼袈裟をひらき我かゝるうるゝしき袈裟を着るならゞ世の望み足りおんとてさめ〳〵と泣けれゞ廣謀といふ和尚すゝみ出老僧さゞかり此袈裟を愛し玉ふおらゞ計事を以て奪ひ取さまへ今客僧旅の勞れゝて禪堂の中ゝよく寐たり急ゝ堂の四方へ柴薪を積上火を付て燒殺さゞ此袈裟自然老僧の品とあるべゝ老僧是を聞てゝぎりなく悅び此はゝりと究めて妙なりとて衆僧に命じて其用意をおしたりける此時悟空ゝ三藏と倶に禪堂の内ゝ睡り居たりしご外面ゝ人音さゝゝがゝきを聞心ゝおやしみ忽ち身を變じて一ッの蜂となり窓の間より出て親ふゝ多の僧ども柴薪をつみて禪堂をやかんとす行者是を見て果して師父の言のごとく我袈裟をとらんと欲してゝ〻る惡心を發しけるゝよおよし〳〵我もまゝ他ゞ計とゝ就て計事を行ゝんと直に天ゝ駈登皇目天皇の許に走り行辟火罩を借來り禪堂の上ゝ打ふゝ以其身ゝ後房の屋上に蹙して袈裟を守護し火の燃出るを待ゐたりもろ〳〵の僧徒行者ゞゝ〻る手術あるともしらず禪堂の廻りへ火を放てゞ行者忽ち大風をまねき出し火焰四方ゝ散して本堂方丈回廊鐘櫻ことゞ〻く燃上り防ぐべきやうあらされゞ僧徒皆あいてさわぎ器財衣服を拿て猛火の中ゝ逃走りおめきさけぶありさまゝ目もあてられぬありさまあり衆に觀音院を南へ去る事二十里ゝして黑風洞といふ所あり洞の裡ゝ一個の妖精有此火光を見て火を救ゝんずやと雲に騰て觀音院に來りて見れゞ諸堂ことゞ〻く火焰の中にうつもれたるゝ禪堂と後房のみ更ゝ火移ずあやゝと目を止て是を見るゝ後房の屋上ゝ一個の老猿在て風をまねきて坐し居さりゝの妖精忙ぎ房中ゝ入て見れゞ案上ゝ霞光瑞彩かゝやきわたる錦襴の袈裟を置たり妖精是を見て心ゝよろこゞ密ゝ袈裟を偷んで黑風山へ歸りけり既ゝ五更の天に

いたり火もやう〳〵よしづまれば行者禪堂ゐ蔽ひたる辟火罩をとりて天ゐ上り廣目天皇ゐ返し復蜂とゐりて禪堂ゐ入り師父を呼起して事の子細を物語りぬれば三藏大きゐおどろき玉ひ忙ぎ門と開きて見玉ふよさーも華麗に建つらねたる觀音院悉々く灰燼とゐりて禪堂後房のみ纔かよ殘れり三藏いゐきれゐゐげら先袈裟をとらんとて馬を行者よ牽せて後房の方へ來り玉へばもろ〳〵の僧徒三藏師弟を見て大きゐ驚き一齊ゐ老僧い是神人ゐりうゐる大火よいまだ曾て燒死せずいや〳〵袈裟を返し玉へとヤよそ老僧も殊よ驚きうの袈裟を尊れ共いづちへ行しやさらよ見へず今い唐僧よ逢て何云分すべきやと遂ゐ柱の元ゐ立よんて頭を碎き死たりける行者是を聞て大きよ怒り必定下僧徒がかくしたるゐ違ひなしとて燒殘り箱籠を查すれども曾て袈裟の影くへを見ず三藏此体を見て深く行者をうらみ你我實具を猥ゐ他人に借あたへ今何のはうりをかあるやいやく袈裟を尋ね出さずんば我必ず緊箍呪を唱ふべし行者聞て大きゐ懼れ師父ゐならず此袈裟とたづね出しヤべしとて衆僧にひうひ問て曰く此ちかき邊りに妙精の住事いゐきか院主の曰く是より二十里計り南ゐ黑風山黑風洞とヤ處あり洞れ裏ゐ一個の黑漢あり此者常ゐ老僧と交り深く當院へも往來せり此黑漢頗る神通ありて此ほとりの妖精ゐり行者の曰く師父の袈裟を倫みとりしい將よ此妖精よ疑ひゐーいで取うへして來るべしとて三藏よ暫時のいとまを乞忽ち雲ゐ飛びのり南とさして出行ければ衆僧行者ゲ神通と見て大きに驚きいよ〳〵三藏を尊敬し後房に留てもてなしける

行者大鬧黑風山　觀音收伏熊羆精

孫行者觔斗雲よ騰黑風山よ來り空中より覗み見れば石崖の下ゐ三人の妖精居あらびて物ゲたりす其一人い件の黑漢左りの一人い道人右ゐ坐したるい白衣秀士ゐり行者雲を下りて崖の陰にうくれてその物ゲたりを聞ゐ黑漢の曰く明日い某しが母離日ゐり同公を請て一杯を酌べしさても昨夜錦襴の佛衣を得たり明日の酒宴を佛衣會と号公等ゐ是を見せ申さん行者是を聞や否や如意棒を打振り跳り出你黑漢我袈裟を倫み佛衣會をゐさんとや取出して我ゐうえさずんい此鐵棒忽ち你ゲ身を粉ゐなさん三個の妖精是を聞て大きにおどろき黑漢い風と化して逃れ行道人い雲よのりて走り秀士一人蹤ゐ後れたるを只一棒よ打殺せば白花蛇と變じさり行者是を見て黑漢いうゐらず熊の精ゐるべし何所に隱るゝともさゲし出して袈裟をとりうへさずんば止まじと其山中を尋るに一座の洞ゐり石門うたくとざし石板の上よ黑

風山黒風洞と書たり行者鐵棒を揚て門の扉を打大音に罵つて曰く賊怪早く唐僧をかへせと呼れゞ黒漢身に甲冑と着し手に一桿の黒纓鎗を提門を開てゐどり出て行者と鎗をまじへ戰ふ事十余合かの黒漢敵しかたくやわりけん身をこのへして洞の中へ入り石門を扉したり行者も三藏の待詫玉いんとを恐れ觀音院へ立歸り黒漢の袈裟を偸み隱し置たるとをくわしく物がたり後房に入て齋飯を吃ひ再たび黒風山へ赴けるに其道に黒漢が屬手の小妖精匣を持て出來る行者見るより只一打に打殺しその匣を開き見れゞ則先に頭を碎死たりし觀音院の老僧を接待せる書帖あり行者讀終り身を變じてかの老僧像とあり洞門に至りてうくと案内すれゞ黒漢大きにあやしみ觀音院の老僧うくゞかり速うに來るべきやうあし是い老狼めが化たるよてこそあらん我是を試みんと先佛衣と隱し置請て客殿に請し兎角の對話しける處へ巡山の小妖あいたゝしく馳來り大王の觀音院へ送り玉ふ使者を孫行者が打殺し則その行者觀音院の老僧と像を變じ洞の中へ入ひと注進す黒漢聞もあへず鎗を拿て突きかゝれゞ行者も本相をあらいし鐵棒を耳の中より引出しさんゞに戰ひける此時天色すでに晩いまだ勝負も分らざれゞ戰ひを明日と約し黒漢い洞裡に歸り行者いまた觀音院へ立歸りぬ翌

早朝行者又立出往んとするを三藏引留て曰いく你ひゞくくへゞ行や行者の曰く我此度のことをよくゝ考へ見るに都て是觀音菩薩の仕業あるべし我南海に往て菩薩に此事を問んと欲す三藏の曰く你南海に至りいつゝ爰に歸り來るや行者の曰く我必ず午時飯時にい歸るべしとて觔斗雲に騰がり直に紫竹林中寶蓮臺の下に至り菩薩にむかひてゆけるい你我西へ赴くに其道に禪院を作りおきて人間の香花を受其隣に黒熊精を住しめ渠に師父の袈裟を偸ませたるい何故ぞや今我と同く彼所に往て袈裟をとりて我に返候へといふ菩薩の曰く你潛竊いりを云とあゞれ你師父の言葉に去たがいず袈裟を小人に借あたへ又風を呼び火をおこして我下院を燒いらひ妖精に袈裟をぬすまれたるい原你がわやまりあり行者却て我處に來りて圖顛話いふい何事ぞやと嘖り給へゞ行者忙禮拜し菩薩我罪をゆるし玉へ只かの熊精袈裟をうへさず我恐るるい師父の呪いをとるへ玉いんとを菩薩慈悲をたれて袈裟をとり返し玉いるべしとゆに從ひ遂に觀音祥雲に打のり行者とゝもに黒風山に至り玉ふ此時一個の道人手に仙丹二粒を玻璃の盤にもり岨をあゆみ行けるを行者見るより走りよりて一棒に打殺菩薩に向ふてゆけるい此道人い是蒼狼の精あり今日熊精の誕生日を賀せんため此仙丹丸藥を持

て黒風洞に至る者あり菩薩身を變して今の道人となり盤を捧げて彼洞に至り玉へ我い丸藥と變じて盤中に上り熊精が呑下すを待て腹腸を攪乱し而して彼袈裟を出させんに他其るしみにたへねねるあらず袈裟をうへすべし觀音大きに打笑ひ玉ひ則道人が像に變じ玉へば行者い一粒の仙丹に化し盤の内にまろび居たりうの盤を兩手にさゝげ洞の内に入給へば黒漢忙ぎむりへ奉り客殿にいざあい坐定りて後菩薩の玉いく小道一粒の仙丹を獻じて大王の毒を賀し奉つるとて盤を黒漢の前にさし出し一玉へい熊精大きによろこび則丸藥をとりて口中に入たりける行者急に腹中に飛入り手脚を延て舞躍る熊精仰天する事大りたあらず命とゆるせいのちを免せとさけびけるに菩薩忽ち本相と顯いし玉ひ命ぶしくば袈裟を出し返すべしとの玉へば熊精いそぎ手下の妖精を呼んで袈裟とり出して菩薩の御前にさし置たり此時行者鼻の孔より飛出袈裟を取て走り出るを熊精怒て鎗をあげて突んとす觀音菩薩ふところより金箍一つをとり出して黒漢が頭に戴うせ呪を念へ玉へば熊精頭をゝゝへ地にまろひあゐ疼や頭痛や菩薩吾をゆるさせ玉へと泣叫て詫けるに觀音則ちかれが爲に磨頂受戒し給ひ御弟子となして南海へ引領玉へば行者菩薩に向ひ禮拜し袈裟をさゝげて觀音院へゝりけり

觀音院唐僧脫難　高老莊行者降魔

さる程に玄奘三藏いかんゐく袈裟を取返し衆僧にいとまを告げ觀音院を立出玉ひ西に行事七日斗爰に一人の後生あいたゞしく走り行くを行者聲をかけ引住て問て曰く此所い地名を何と号候やうの漢答て烏斯藏國の地高老僧と云捨て走りゆくを行者とらへて再たび問て曰く你何事ありてゝくいあいたゞしく道を走るやうの漢の曰く我い此所の住人高太公といふ者の家人高才と云ものあり我家過し年女に婿をとりしが此婿妖精にて後宅に女を引入其生死を人にしらしめずさるによつて今修驗者をまねきてうの婿の妖精をとらへんとす行者笑ふて曰く你遠く修驗者を尋るに及ばず吾ばけものを捕るに妙を得たり我徒らをいざあひいやく家に歸るべし此漢行者が言を聞て半い信じ半いうたがひ遂にいざあいて家に歸る此家の主人高太公門を出て向へけるが行者が像のあやしげゐるを見て大きに恐れ家人高才を呼で曰く我家すでに妖精のためにあやまさるゝ事少うらず你其上にゝる雷公を伴ひ來るい何事ぞや行者是を聞て曰く老人我を恐れ玉ふ事あかれ我うたち聞といへども妖精を

捕る事我原來手段あり高太公爰ゝふゐて両人を請し入て座すでゝ定りけれバ三蟠主公ゝ禮をゐして曰く貧僧い東土唐國よりはる〳〵西天ゝ至て經をもとむる者ゐり此家の妖精といろゐる者ゝ候やと問給ハバ太公の曰く三年以前の事ゝて候一人の漢來り我女の婿たらんとを乞ふ我其何處の人たるを問バ福陵山の產姓い猪とゆすよし我他が妖精ゐるをしらずして遂ゝ招きて婿とゐすゝ他さま〳〵ゝ形を變じ遂ゝ長嘴大耳ゐる獸子とゐり其食を吃ふ事常人の三十人當ゝ猶過たりされども常ゝ精進ゝして腥さきを曾て喰いずもし他腥さきを好まバ我家產忽まちゝ倒るべしゑりのみゐらず風を起し雲ゝのりて往來し剩さへ我女を殘れ宅ゝひき入ふたゝび其面たゝ見たる事ゐしせめてい女の生死を問バ我希足りとてさめ〳〵とこそ歎きける行者是を聞て打笑ひ太公こゝろを安じ給へこゝよひゐらず此妖精をとらへ此家を去らしむべし太公よろこぶ事かぎりゐく齋飯を備へてもてゐしける日すでゝよくれけれバ行者鐵棒を提後れ宅ゝいたり見れバ門扇かたくとざしたり行者鐵棒を以て一打ゝ打碎き裡ゝ入り臥たる女ゝ向ひ妖精いづくゝゐるや女勞れたる聲を出し渠日とゝ雲ゝのりて出行その行所をしらず行者則ち女を引立本宅へ立りへらせ其身いゐの女のゐたちゝ變じ房

ゝ入て臥居たり去バらくありて一陣の風吹來り口長く耳大きゐる妖精空中より下り來り直ゝ房裏ゝいたり牀の上ゝ登らんとす行者則長き嘴をとらへて突落せバ妖精甚だ驚き今日你何故ゝゐくい力强きや我歸るの遲きをうらむるゐあらずや行者の曰く我今日こゝろゝゐいざる事ありかまゑてちかゝり給ふゐ妖精の曰く你何ぞゐくのごとく我を恨るぞ我此家の茶飯を吃ふといへども又田畠を耕し家業の事をおこたらず你が衣服食用ゐ至るまで皆我設ゝて事足れり余其你が心ゐかゐいざるい何事ぞやと問ふ行者の曰く今日我父母外面ゝありての給ふい我婿いあやーき者ゝて人間のたぐひゝあらず今修驗者を

まねきて逐出すべしと云給へり我是を聞て甚だ心よこれとくるしむ妖精の曰く你心を用ゆる事あり我原來天罡變化の術あり又九齒の釘把を持たり何者とかおそるべき行者曰く我父上の宣ひしい齊天大聖といふ通力の神をまねき君をとちへ去めんと云玉へり是よも恐れ玉はぬやといふ其時妖精おどろきたる顏色よてそれこそ天宮を鬧ゲせし弼馬溫孫悟空あり渠もし來らバ敵しがたしとて座を立て出んとす此時行者本相をあらわし我い側孫悟空あり妖精これをみてあわておどろき忽まち方道火光と化し福陵山をさして逃走れバ行者も又雲よ騰ゲりのゲすまじとて追て行

雲棧洞悟空收二八戒一

孫行者い妖精ゴ跡を追ふて福陵山よ至り見れバ一個の洞あり雲棧洞の三字を門上よ彫付たり洞の中よりの妖精九齒の釘把を提ふとり出て呼いつて曰くそも〳〵我を誰とゆ心ふ其往昔い天上よ在て天逐元帥の職を任せられしゲ王母瑤池の會の時我醉よまゆせて嫦娥をとらへ戲れし科よより下界へ謫下され錯つて猪の胎よ入り遂よ此山よ止り名を猪剛鬣といふものあり你五百年前天上を鬧せし孫悟空ゆんのためよか爰よ來るや行者曰く我今邪心を

浮屠山依柴受二心經一

あらため東土三藏法師を守護し西天よ往て佛を拜し經と需んとす你高太公ゲ女をくるしめ惡行をゆす故ゆ唯一棒よ打殺さんとすいやく來つて勝負と決せよ妖精是を聞て忽ち釘把を捨てヤけるい我向に觀音菩薩の勸よより受戒持齋し經を取人よ去たゲひ西天よ往て佛を拜せんと此所ゆ待と既よ久し顯いくい吾を引て三藏法師よまみへしめよ行者ゲ曰く你か云ふ所恐らくい僞ゆらん實よ唐僧よ去たゲひ西天よ至らんとゆらバ招ひを立て我よ見すべし妖精其時天よ向ひ合掌も南無阿彌陀佛此言妄りゆらバ忽まち天の咎と受け屍を劈と方段ゆらんと趦とゆせバ行者遂よ妖精を伴ゆひ三藏の前よ禮拜し師父我罪をゆるし給ひ憐みを垂れて徒弟とゆし西天へめしつれたまへとて先よ菩薩の教誨一給ひし事を委細よものがたれバ三藏大きよ悅び給ひ遂よ師弟の約をゆし且其名を問給ふよ妖精答て菩薩我よ法名を賜り猪悟能とヤひ三藏曰く此名你ゲ法兄孫悟空と同狐ゆり我又你よ別名をあたふべーとて八戒と号給ふ太公此始終を見て大きよよろこび靑錦の袈裟と鞋一足を八戒よあたへ又二百兩の銀を三藏よ献呈す三藏あへてこれを受給いず暇を告て立出給へバ八戒い行李を脊おひ行者い鎖棒をふりゝたげ三藏を供奉一西の方へいそぎける行事一月ばゝりよして浮屠山といへ

る高山に至り鳥巣禪師に謁し給ふ此禪師とゆい香檜樹上に巣を作り其中に住給ふ四方よい麋鹿の類ひ花と捧げ猿猴の属菓物を献じ青鸞彩鳳ひとしく啼白鶴錦鷄多く集る三藏馬より下りて禮拜し給ふに禪師もまた木を下りて答禮し心經一卷を三藏に授け魔障の難あらん時此經をとゐへばかのつから害を逃れいべしとありけるに三藏謹んで此經を記憶拜謝して西におもむき給へば禪師も金光と化して巣の中にかくれ給ふ

黄風嶺唐僧有レ難　半山中八戒爭レ先

扨も三藏師弟い月をりさね日を送り西方へといそき給ふよいや夏のいしめ黄風嶺といふ山によさしかゝり給ふに山の麓より猛虎一疋むどり出たり八戒是を見て釘把を取て立向ひ虎の頭を突んとす此虎又一個の妖精にて忽ち人のごとく立て焉りて曰く我い黄風大王の麾下虎先鋒といふ者なり你等凡夫をとらへ歸て案酒とあさん八戒も又怒て曰く我徒らまた何ぞよのつねの凡夫あらん東土大唐の聖僧を供奉し西方に往て佛を拜し經を需るものなり你道をひらき通さずんば只一突に突殺すべし虎先鋒大きにいかり鼠の中より鋼口の刀を取出し八戒と戰かふと十余合行ふこれをたすけて妖精を打殺さんとて鐵棒をふるふて打てかゝる虎先鋒今いかなるいしとおもひ身を返して逃れけるが忽ち金蟬脱殼の術を行ひ身の皮を脱下し傍なる石上に打着せ虎の踞まりたるかたちをなし本身い風と化して走りしが道に三藏の座しておわしけるを一捫に提げ洞の中へ立歸る行者八戒い虎を追ふて山を下りしが件の虎崖の傍に臥したりけるを得たりうしこしと棒と上てはた打に只虎の皮ゐて大石を包みたるなり行者大きに驚きこの妖精金蟬脱殼の術を行ひ我徒らを欺むきたりはやく立歸りて師父を守護せんとて八戒と供奮の處に來り見れば南無三寶三藏いおわしまさず行者雷れとくおめき叫び口惜きとうる師父いずでに妖精にとられ給へりいづくまでも追行て尋ね逢で留んやと山中をりき亂して尋ける去りるに山の凹たる下に大きなる洞あり門上に黄風嶺黄洞と云五字を書たり行者鐵棒を揚て門の扉を碎るまで打たゝき我師父をかへさずんば此洞を鑿塵にせんと大音に罵たり此時洞の中にい黄風大王三藏法師を見てゆけるい此僧原大唐にいて德高き聖僧なり是が弟子に孫悟空といふ神通廣大の者ありと聞及べり他が尋て來るや否やを待て此法師を吃ふべしとて椿木に三藏をうらめ付し處に行者洞門に來つて返せ〳〵と叫びけるにおされべこそ孫悟空なりめとて虎先鋒洞門をおしひらき行者に向ふて討てかゝ

れバ行者鐵棒を水車よまわしさん〳〵よ戰ひしゞ虎先鋒いかでゝ行者よ敵すべき身をうへし山の小路を逃行けるゝ猪八戒爰ゝ有て汝を待事已に久しと云も終らず釘把を拿のべ只一突よ虎先鋒を殺したり行者是を見て八戒を稱讃しふた〳〵び洞よ入て師父の命を救ハんと一手ゝ鋒棒をひつさげ一手よハ殺したる虎を引づり洞門さして駈行ける

護法設し莊留二大聖一　須彌靈吉定二風魔一

孫行者死たる虎を率て黄風洞よ來たり我師父を返さずんバ此虎を以て例とせんと大音よ罵しれバ黄風大王三股鋼叉を提げ門外よ走り出我汝ゞ師父を吃ざるよ汝却て我先鋒を打殺せり今其仇を報ずべしとて行者と戰かひをいどむと三十余合行者一把の毛を拔口よ含みて噴出せバ變じて百千の行者となり八方より黄風王をとり圍む黄風王もまた口をひらきて氣を吐よ忽地黄風大きよ起り毛の變じたる行者悉々く虎空よ吹上られ足もたむべきやうどなし行者急よ毛を集めて身を返し風を潛りて突來るゝ黄風王ふた〳〵び行者ゞ面よ向ひて怪風を吹かくれバ此風行者ゞ眼よ入て更よ目とひらく事あたハず行者大きよ驚き身を返して逃走るを黄風王もまたこれを追ず風を收めて洞の中へ歸りける行者八戒よ逢て戰ゝひの始終を物ゞたり妖精猥よ我師父を殺すとあるまじけれバ再び謀計を定めて救ひ出しまいらせん我怪風よ吹れて眼珠痛み涙流れて止ず此邊よ眼科先生あらバ療治と受て後戰ゝふべしとて八戒と共よ馬をひき山の麓の人家よ立より一宿を乞ひけるよ裏より老翁一人立出両人をいざあい入胡麻飯をすゝめもてなしける時行者老翁よ問ふて曰く我今日黄風洞の妖精と戰かひ風よ吹かれて眼の痛たへゞたし此ほとりよ眼藥を賣家やあると尋るよ老翁曰くかの妖精ゞ吹出す黄風昧ゝ神風と號て人の命を縮む神仙四方よはらされバ治することあたハず我家よ花九子書と云仙藥あり風眼を治するの仙方ありとて取出してあたへけれバ行者大きよよろこびくすりを目よ點じ八戒と同じく其夜ゝ爰よ睡りける夜明て行者目をひらき見れバ眼さらよあきらゝよ常より益々よし起上りて四方を見るよありし家居も老翁も俱よ見えずありて只柳の木ゝげよ八戒と同じく臥居たり八戒大きよ愕ろき我何時ゝ〳〵る荒野よ寐たるぞやこゝもとよ家ゝありし老翁ゝ何地へ行しとうろたゆるを行者笑ふて汝獣子氣を去づめて樹の上よかけし帖子を見と云八戒仰で是を見れバ四句の頌なり其詞よ曰く

莊居非是俗人居　護法伽藍點化虛

妙藥與レ君 醫二眼病一　　靈レ心 降レ怪 莫二躋 關一

行者八戒ゑ示して曰く是伽藍觀音菩薩の命を受晴ゑ師父と我々を保玉ふものゐり你爰ゑ在る馬と行李を守るべし我い師父の安否を窺ゞひ來らんとて洞の前ゑ飛入り身を變じて一個の蚊とゐり洞中へ飛入り師父をたずねるゑ椿の木ゑ三藏をうらめ掛たり行者師父の頭の上ゑ止りて師父〳〵と呼けるゑ三藏行者ゞ聲を聞驚ゞへりたるゐ地して悟空你いずくゑ在と問へゞ行者ゞ曰く我い是則師父の頭の上ゑ止り在り我今日中ゐ妖精をとらへ師父を救ひ奉つらん心安く思ーめせとて又飛行て黃風王ゞ居間の梁りの上ゐ止りてうゝゞひ聞に忽ち一個の小妖走り來り某ー只今山を巡見ひ處ゑ耳大きく口長き和尚林の中ゐ在て把釘を振てすでに我を殺さんとす我やう〳〵ゐ逃れ來りひゞきのふの毛臉の和尚い見えヤさずと云黃風王聞て孫行者い昨日の風ゐ中り必ず死ゑたる者ゐらん此上いうゐる强敵來り攻るとも我是を塵死ゑすべーー只我風を鎮るものい靈吉菩薩のみゐりと云行者これを聞て大きゑよろこび洞の中を飛出本相を顯し八戒を呼て黃風王ゞ云し言を物ゞたり靈吉菩薩の住處いづくゐらんと二人商議して居りける所ゑ忽まち老翁一人步行來れり八戒の曰く師兄此老人ゑ問

玉いんいうゑ行者點頭て老人の前に走り寄り靈吉菩薩の住玉ふ所や知り玉ふと尋るゐ老人答て此正南ゐ小須彌山といふ山ゐり是靈吉菩薩の住所ゐりかく云我い太白金星李長庚ゐりと云終て清風と化して飛去り玉ふ行者是を聞て直ゐ觔斗雲ゑまたゞり暫時ゑ小須彌山ゑ至り靈吉菩薩ゐ事の子細を物語師父を救ひ玉へとヤすゑ菩薩そのまゝ領承ゐりて定風丹を懷中ゐし飛龍寶杖を携へ行者と打つれ雲ゑ乘て黃風洞ゑ至り玉ふ行者洞の前ゐすゝみより鐵棒をもつて門の扉を徹塵ゑくだき黃風來れと叫びけれゞ黃風王大きゑ怒例の銅叉をさげおどり出て行者と戰ゝふ事數十合黃風王またもや口を開きて風を吹んとゐしける時靈吉菩薩雲中より飛龍寶杖を投下し玉へゞ忽まち八爪の金龍と變じ黃風王ゞ頭を掴んで空中へ引上れゞ遂ゑ黃風ゞ本相露れ黃毛貂鼠とゐりゑける菩薩行者ゐ宣いく渠い靈山ゐ住し得道ゐるゞ琉璃盞の清油を偷み金剛ゞ爲ゐ把へられん事を恐れ此所に來て妖精とゐれり我れ渠を如來の許へつれ行御下知によりて計らふべき旨ゐりとて遂にかの鼠をとらへ西の方へ去り玉ふ行者西ゑ向て禮拜し八戒と俱ゐ洞の中ゐかけ入り小妖を悉々く打殺し師父を救ひ出し暫く洞内ゑ勞れを休め再たび路をもとめて西をさして行玉ふ

八戒大戰二流沙河一　　木叉奉レ法收二悟淨一

寒蟬敗柳よ鳴き大火西よ向て流るゝ秋のはじめわありけれバこゝろぼそくも三藏い二人の弟子よいざあれ嶮難を凌ぎ道を急ぎ玉ふよ忽前面よ一條の大河わり大波湧かへりて河の廣さ其いくばくといふ限りを知らず岸よ上て望み見る時傍らよ一ッの石碑あり上わ流沙河の三字を篆字よて彫付腹上よ四行の小楷字あり

八百流沙界　三千弱水深
蘆花定底沈
蘇毛飄不起

三藏是を見てさてい聞及たる流沙河あり何さま此河を渡らんこと容易とよわらずと河岸よ立て眺玉ふよ忽ち河浪山のごとく卷上り一個の妖精あらわれ出たり八戒把釘を提げ走り寄て是を見れバりの妖精頸よ九個髑髏を繋ぎ掛け一根の寶杖を振て八戒を目ゞけ討てかゝる八戒も把釘を持てさゝへ戰ひすでよ二十余合よ及ぶ所よ行者錫棒を揚て戰りひを助けんとす此妖精行者ゞ來るを見て叶まじくやおもひけん深く水中に沈みて行方を見失ひぬ八戒大きよ怒て罵りけるい我むりし天上よ在て天河水兵を督どり頗ぶる水性を知れり何處へ隱るとも拿へ來つて此河案内させんと云も終らず直綴を脱ぎ把釘を提水底に潛りけれバりの妖精杖を擧てさへぎりとゞめ水中わ在て戰かふ事半時ばかり八戒心中よ一計を生じ偽り負て水上わ走り出れバ妖精逐すまじと同じく追て水面よあらわれ出涙を蹴立て二時計も戰ひしが行者また八戒を助んとて雲わ打乘り錫棒と振てすゝみけれバ妖精是と見て再たび水底へ引入たり八戒行者に向ひ罵りけるい你急猴子我妖精を奉て岸よ上らんとおもふ所よ再たび來つて水底へ放ち遣りたり行者笑ふて你嚚しく云とおりれとて兩人ひとしく三藏の御前に來り戰ひのさまを物語りりさねて行者申けるい今日い已よ晩わおよべり夜あけわバ再び計事をめぐらし此妖精をとろふべし師父こゝろを安んじ今宵い此川端よ一夜をわかしたまへとてまた身を起し雲よ乘り人家を尋て一鉢の齋飯を携へ歸り師父よすゝめまいらする八戒問て曰く哥々何國わ往て齋飯をもとめ來るや行者曰く北の方七千里の内に人家わるとあし我此齋飯をもとめし家い爰を去ること凡壹万里八戒笑ふて曰你偽りを申事なりれかゝる遠き道をいうでゝ須臾の内わ往來せんや行者の曰く你いまだ知らず我觔斗雲い一瞬飛行と十万八千里いわんや五七千里一万里の道を行い一たび頭とふるよりも猶やすし八戒ゞ曰く哥

々左ばくり飛行よ自在あらば水中れ妖精を打捨て師父を背て一とびゐ此河を渡り候へ行者の曰く你も原來雲よ騰る事を知れり何ぞいやく師父を背て先此河を渡らざる師父い凡胎肉骨の人あるゆへ雲中ゐいざなひ俱よ飛行する事あたいず彼大山を移し大地を縮る法よ至ていい我よく是を行へども苦海超脱せざる人を携さへ一すも勵事あたいず只々師父の身命を守護し我徒ゞ業果の滿ると待ばくりゐりとくたり合て其夜い川岸ゐ一夜をあかしぬ翌朝行者師父よ向ひて曰く此河の妖精我々ゞ計略よ陷らず我今より南海に往て觀音菩薩をたのみナべし師父い八戒と暫時此處にまたせ給へとて雲に飛のり南をさして出行けるほとゐく普陀落山紫竹林よ至り菩薩を拜し流沙河ゐ妖精ありて師父渡りゐなやみ候ねゞわくい菩薩計とをおしへ玉へとて戰ひの始終と物語りければ菩薩の曰いく流沙河の妖精い吾先よ善をすゝめ唐僧を守護して西天よ行とを約し設ぬ你徒經を取るとを云ば集みづくら歸順すべきよ要おき事を勞するものゐおと笑ひ玉ひ木叉をめされ你流沙河よ至り悟淨を呼出し唐僧を守り河を渡すべしとて一個の紅葫蘆をとり出し木叉ゐあたへたまへば行者拜謝して木叉と俱よ雲よのりて流沙河よ至りければ木叉則ちくりの葫蘆をさゝげて流沙河の水面よ至り沙悟淨いづくよあるや經をとる人爰よあり早く來りて渴を乞へと呼びければ忽ち大浪をひるゞへしゐの妖精あらわれ出木叉を看て禮をゐし菩薩いいづくよおいしますやと問ふ木叉曰く菩薩い來たり玉いず我ゐ命じて你を唐僧の弟子とゐし此河を渡しナせとの仰也妖精是を聞て曰く其唐僧いいづくよありや木叉曰く東の岸上よ座せる僧則ち是ゐり妖精大きよおどろき黃錦の直綴をゐぶり岸よ上り三藏の前よ禮を行ひ弟子師父の尊容を知らず多の不禮をなしたり願くい其罪をゆるし玉へ三藏の曰く你眞實に我教を守らんとするゐ妖精の曰く弟子向よ菩薩の教化を受法名を沙悟淨と賜り師父の來り玉ふを待詫てこそ候得何ぞ僞いり申すの理ゐらんや三藏是を聞て大きよよろこび別よ名付て沙和尚と呼び玉ふ其時木叉沙悟淨をまねき首よかけたる九ッの髑髏を索ゐて繫ぎ菩薩より賜りし紅の葫蘆を其水中ゐ居へ水に浮めて三藏を請てこれを乘せまいらせ八戒沙淨右左に在り孫行者龍馬を牽て後にしたがい木叉い雲ゐのりてこれを守護し飄然として流沙の大河を西の岸ゐ着給ふ木叉いそぎ葫蘆をとり收めぬれば九個髑髏も陰風と化して消失たり三藏木叉に向て再三拜禮一三人の弟子と俱よまた西の方へいそぎける

西遊記卷之一終

明治十六年三月三日御屆

編輯人　青森縣士族　手塚盛壽
京橋區南鞘町三番地寄留

出版人　東京府平民　辻岡文助
日本橋區横山町三丁目二番地

（定價金二十八錢）

函館　魁文社
信州諏訪　藤森平五郎
〃　宮坂春與次
〃　〃　吉左衛門
〃　〃　武居茂吉
〃　〃　丸屋庄兵衛
〃　〃　高美甚左衛門
〃　松本　小松爲吉
〃　〃　大塚八十兵衛
〃　〃　竹内禎十郎
〃　〃　篭田重平
〃　〃　宮島市三
〃　上田　柳澤德彌
〃　小諸　小山佐傳次
〃　〃　〃　九郎兵衛
〃　高遠　矢島金八
〃　飯田　十一屋半四郎
〃　常磐城　上の屋辨吉
〃　長野　小桝屋喜太郎
〃　〃　成田良三郎

大阪　前川源七郎
〃　〃　岡島眞七
〃　阿州徳島　坂井万吉
〃　〃　飛彈高山　桝屋重兵衛
〃　遠州掛川　三原屋甚藏
〃　尾州名古屋　美濃屋代助
〃　〃　〃　〃　清七
〃　甲府　掘田勘助
〃　〃　東浦榮次郎
〃　〃　小西屋庄左衛門
〃　〃　五明堂正八
〃　駿州静岡　藤森善七
〃　〃　今津美之助
〃　〃　杉本平七
〃　〃　喜多川屋茂右門
〃　〃　大和屋利兵衛
〃　〃　御殿場　曾比屋平七
〃　相州小田原　翁屋重兵衛
〃　〃　川上九兵衛
〃　藤澤　鉴屋清兵衛

越後新潟
林富吉
越中屋長八
仝與八
仝淺野六平
仝樹口屋小左衛門
仝淺間屋傳左衛門
三條
丸山音八
加茂
番場吉次郎
冰原
西村六平
沼垂町
山本屋久兵衛
高田
中村政治
藤屋直三郎
寺島權四郎
六日町
目黒宗内
長岡
與板屋重吉
佐渡相川
山口万吉
加藤利七
万屋長藏
本間孫治
國本吉右衛門
仝厚木町
高梨與左衛門
仝文明堂
仝伊勢屋梅藏
仝横濱
仝池田孝吉
仝田澤多一郎
武州熊谷
仝鴻ノ巣
仝近江屋平吉
仝杉浦平左衛門
仝長島爲一郎
仝中村朝次郎
仝浦和
仝本屋文藏
仝八王子
仝小町屋德次郎
仝秩父
仝大澤鶴四郎
仝本庄
仝諸井巴
下總佐原
仝森田芳次郎
仝堤平
仝成田
仝淺井小三郎
仝野田
仝高木直次郎
仝境町
仝梅屋林藏
常州太田
仝合津屋茂兵衛
仝土浦
仝塚本權左衛門

仝加州金澤
仝北野半七
仝近江八郎右衛門
仝知堂
仝新
磐城三春
仝硯屋傳吾
仝桔梗屋定藏
仝西村重兵衛
同白石
仝鶴屋喜六
仝柳倉
仝鍵屋平兵衛
岩代福島
仝近江屋周助
仝光白屋清二郎
仝都誠
仝田
仝島屋藤吉
仝上野屋彦太郎
仝鍵屋善兵衛
仝針道村
仝渡邊彌助
仝川俣
仝齊藤八四郎
仝若松
仝田中善平
羽前山形
仝佐瀨治善助
仝文字屋作右衛門
仝太右衛門
八
荒井清作
仝中濱左衛門
仝野州足利
仝宇都宮
仝江戸平左衛門
仝新井金太郎
仝西江屋勇藏
仝万年忠兵衛
仝田中庄太郎
仝上州高崎
仝龜桝屋卯兵衛
仝文心堂
仝前橋
仝藤屋勝藏
仝櫪本屋文次郎
仝塚田屋佐太郎
仝山田屋金兵衛
仝沼田
仝藤岡
仝伊香保
仝安中
仝桐生
仝千卷屋喜平次
仝岸巳之助
仝小林源次郎
仝松野屋貞吉
仝三陸屋利兵衛
仝前石の卷
仝若柳
仝山口敬之助
仝島屋正之助
仝澤田正助
仝陸中盛岡
仝井筒屋藤松
仝黑澤

全　佐竹久六
全　高畑　長谷川虎次郎
全　谷地　田宮五郎
全　上の山　相原多吉
全　萬屋利七
全　米澤　大坂屋清兵衛
全　小山出　須佐權平　辰己屋吉三郎
全　米澤　素月最平
全　村上屋丹七
後　秋田　本間金之助
全　和吉
全　戸島和助
全　戸島吉五郎
全　大曲　能味直治
全　佐々木長藏
全　本郷　能登山五右衛門
全　松峯　叶屋次郎兵衛
全　酒田　白崎善助
全　五十嵐久助
全　京田屋孝次郎

全　登米　阿部清助
全　七ノ戸　加賀や清四郎
全　八ノ戸　福田彌兵衛
全　浦山太郎兵衛
全　陸奥　福永豐吉
全　弘前　山形多助
全　宮本甚兵衛
全　青森　武田莊七
全　柿崎忠兵衛
全　熊田吉助
全　麻口喜助
全　岡清六
全　濱島函館　全藤吉
全　後志小樽　佐々木常吉
全　上野藤太郎
全　石狩札幌　山中益平
全　福井音松
全　大社源造
全　岡駒吉

出版書目

八百屋於七胡蝶の夢　全壹冊
雪鏡談　全三冊
楠公記　全三冊
西遊記　全五冊
參考源平盛衰記　原本七拾五冊
南總里見八犬傳　原本百六冊
通俗繪本三國誌　原本七拾五冊
青砥藤綱摸稜案　全二冊

953

090693-001-1

特41-953

西遊記　（絵入実録）

巻之1，3－7

手塚　盛寿／編

M16

DBN-1289